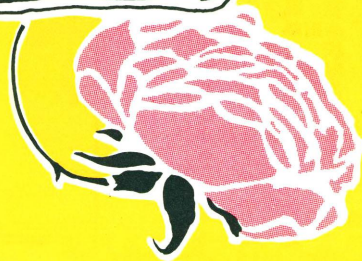




婦人の子と母



第三卷第十一號



謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレール會へ向け何ヶ月分加纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は常會から無代價で御送附します。會員にならないで、たゞ雜誌だけ買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十六年十一月二日印刷
同 年十一月五日發行

不許
複製

發行兼編輯者 東京市本郷區元町二丁目六十六番地
 印刷者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
 印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
 發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内
 發賣所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
 金昌堂

大賣捌所 東京 東京堂●同東海信文會社●同北隆館

婦人と子ども第參卷第十一號目次

子ども

おちば……………くめ子譯
 運野四九内……………やまとの翁
 いそつぶ物語……………記
 お笑ひの種……………近藤とき子
 英語入短話……………久永童山人
 英語一口話……………ゆき子
 獨乙の考へ物。同前號の解……………記
 室内の遊び(影探しと目探し)……………全
 上者

家庭

吾人身體上の悲觀……………寺田勇吉
 誕生日……………記
 某外國人曰く……………
 今いろいろは料理……………石井泰次郎
 山根醫學士曰く……………
 煉乳の分析表……………

學術

情緒……………松本孝次郎
 奇妙な動植物……………田寺寛二

珠鷄の話……………久永達倫

史傳

大題小題(サーモビレーの戰)……………米溪

文苑

わが里……………佐々木信綱

海……………小花清泉

小さき魚……………すみれ

徒然草をよみて……………わふひ

幼稚園の立場と其務……………森岡常藏

幼稚園案内……………東基吉

鹽津みやげ(その二)……………和歌子

秋風荒む……………や歌子

露……………摩訶吉

私立東洋幼稚園の創立……………東基吉

女子高等師範學校△府第一高等女學校△女子大學校△竹柏會佐々木氏送別會△東洋女學校創立△千葉縣女子師範學校△文部省檢定本試験△新刊の讀物△松阪通信△兵庫縣通信△交詢欄△會報

彙報……………



婦 人 と 子 と
第 三 卷 第 十 一 號

お ち ば

く め 子 舞

こちへ来て遊べと

風は木の葉を誘ふ

あかや黄やいろくの

衣を着よ空がくる

よぶ聲さくとすぐ

木の葉はうちつれて

まうたり歌うたり

ちりくにとんで行く

つちの上に休んで

眠る木の葉の上に

雪は白い綿の

夜具をばうちかける

運野四九内

やまとの翁

むかしくある處に、運野四九内といふ少年が居りました。
 なぜこんな變てこな名前かといふに、四九内のするをといつたら
 何時だつて、甘く行つたといふことは一つもない。することな
 す事、皆鶉の嘴の様に食ひ違つてばかり行くからであります
 ある時、此四九内は、新しい家へ奉公に行つて、「どうか、一
 年奉公しますから、お給金の代はりに、麥畑をすこし下さいま
 せんか」と申し込んだ所が、主人も早速承知してくれましたの
 で、「先づよかつた」と安心をして、貰つた麥畑に種を播いて、せ

せと奉公大事に
勉めて居りまし
た。

すると、四九
内の麥の生長く
なることの早い
ことよいたら
ない位で、主人
の家の麥は、ま
だやっと、莖が
伸びた頃には、



もう疾くくに穂
が出来て居るし
主人の麥がやっ
と、穂を出した
時分には、四九
内の麥は、眞黄
に實つて居りま
す。四九内は夫
を見て

『さあ、明日は
いよく麥を

刈らうかな』

などと言つて、獨りて喜んで居りますと、其晩になつて急に雷がなるやら、霰が降るやらして、折角樂しみにして居た麥は、散々になつてしまいました。

『之では、どうも仕方がない、今度は又別の家へ行つて見よう不圖かすると、運が向くかも知れないから』

といふので、其處を出て、他家に行きまして、二年の間奉公しますから、どうか其小馬を一匹呉れませから、といつて見ました所が、その主人も承知してくれましたから、四九内はやがて此家に居て、だんくとその小馬を馴らして仕込みまして、とうく立派な馬に仕立てました。そこで四九内は

「今度こそは、此馬で何か儲けようかな」と考へて居ますと、運のよくないといふのは仕方のないもので、其晩、澤山な狼が廐に這入つて来て可愛相に其馬を、ずた／＼に引き裂いて食つてしまいました。

四九内はもう泣かぬ許りです「今度又他に行つて見よう、少しは運がよくなるかも知れない」

とう／＼三度目に、一軒の家へ行きますと、其處の墓地に大きな石がある、何時からあるのか、分らないし、幾人かゝつたつて動かすことが出来ない位の夫は／＼大きな石なのです、そこで四九内は、此大石を呉れよば、一年間奉公しなすようと申した所が、其家の主人も承知してくれましたから、四九内は

又々其家へ奉公しました。所が、彼の大きな石の上には、立派
 花が咲いて来て、赤だの金だの銀だの、夫はく色々な草花
 が、石に咲いて来ましたから四九内は「さー甘いぞ、今に此が
 己の石になるのだ、誰も動かすことが出来ないから、大丈夫だ」
 といつて、毎朝見ては楽しんで居りました。
 所が運の悪い時といつたら仕様がな。或夕方大きな雷が
 落ちて、此見事な大石が、丸で粉微塵になつて仕舞つた。
 四九内は、もう困つて仕舞つて、何故自分はこの様に運が悪
 いのだらうといつて、獨りぼろく泣いて居りますと、お友達が
 いろくくと慰めてくれて、

「成程君は、どうも運がよくない様だ、夫では、一つ此國の天

子様の所へ参つて、御願ひ申して見るがよい、天子様は、國
民の父だから、不運の人には、屹度よいことを與へて下さるか
ら』

といつてくれますから、夫も尤もだと四九内は、夫からすぐ天
子様の所へ行きました所が、天子様は早速朝廷の役人にしてく
れました。

或日のこと、天子様は四九内を召ひ出して申されますには、
「さてく四九内、お前ほど運のよくない者は先づあるまい、
これまでお前のする事に一つとして甘く行つた事がないじや
ないか、夫で、今日はお前の運試しに一つ面白いことを考へた
のだ」

といつて、天子様は、そこへ同じ様な丸い筒を三つ取り出して
仰せられるは、

『さて、此三つの筒は、一つは金が入ってるし、一つは木炭が
入ってるし、一つは土が這入って居る、そこで、お前は、
其金の這入ってる筒をいひあてれば、いつまでも、此國の役
人になつて居られる、但し木炭の這入ってるのをつかめば、
お前は鍛冶屋にならねはならぬ、夫からひよつとかして、土
の這入ったのが當れば、其時は仕方がない、もう此國には居
ることは出来ないのだ、』

そこで、四九内も、これは一生の一大事と思ひましたから、其
三つの筒を取り上げて、あれか、これかと考へた末、とうく

一つを取り出して、『これには金が這入っています』と申し上げた。所が、夫をうちわって見ると、豈計らんや、土の筒であった。四九内は、もう泣かぬ許りです。

さて、申し渡しを通り、四九内は、又々こゝを出て行かねばなりませぬ。然し天子様も、あんまり、可愛相だと思し召されたので、馬一匹に、刀や衣服などを下さいました。

四九内は、しかたがない、其馬に乗って、こゝを出て行きまし
たが、其日一日、行っても行っても、人の家が見當りません、
翌日になって、又行ってもく、人の家が見當らない、もう、
お腹が空く、足勞れはする、おまけに、馬も何も食べないので
すから、お腹が空いたと見えて、もう、一步も進まない様にな

りました。

所が三日目になつて、ひよつと向ふの方を見ると、乾草が一塊り積み重なつて居る、そこで四九内は、やれくうれしや、まづ馬の食物にだけ、ありついた、どれ早く行つて、馬に食べさせましよう、と思つて、急いで其側まで行きました所が、どうしたのか、其乾草が、中から、ぶすくくとくすぽつてきて、見てる中に、パツと火が燃え上つて來ました。四九内は、之を見て、又力を落して、『おやく』といつて、あきれ立て居ますと、不思議にも、其火焰の中から、

『どうか、助けて頂戴、どうか助けて頂戴』

と、呼ぶものがあります、四九内も、不思議に思ひましたが

『だって、火の中だもの、助けるにしても、側へよれないじゃないか』

といふと、又火の中から

『夫じゃ、卿の劍をさし出して下さい。夫につかまるから』

といひます、奇體だなあと思ひましたが、先づいふ通り、腰の刀を火の中へさし出してやった所が、怪しむべし、一匹の蛇が、くるくと、其刀へ巻きついて、出てきました。

『オヤ〜蛇だったのか』と 惘れて居ますと、其蛇は、鎌首をちよいと上げて、

『折角出して下さったのだから、序でに私の家まで送って下さいな』といふ。

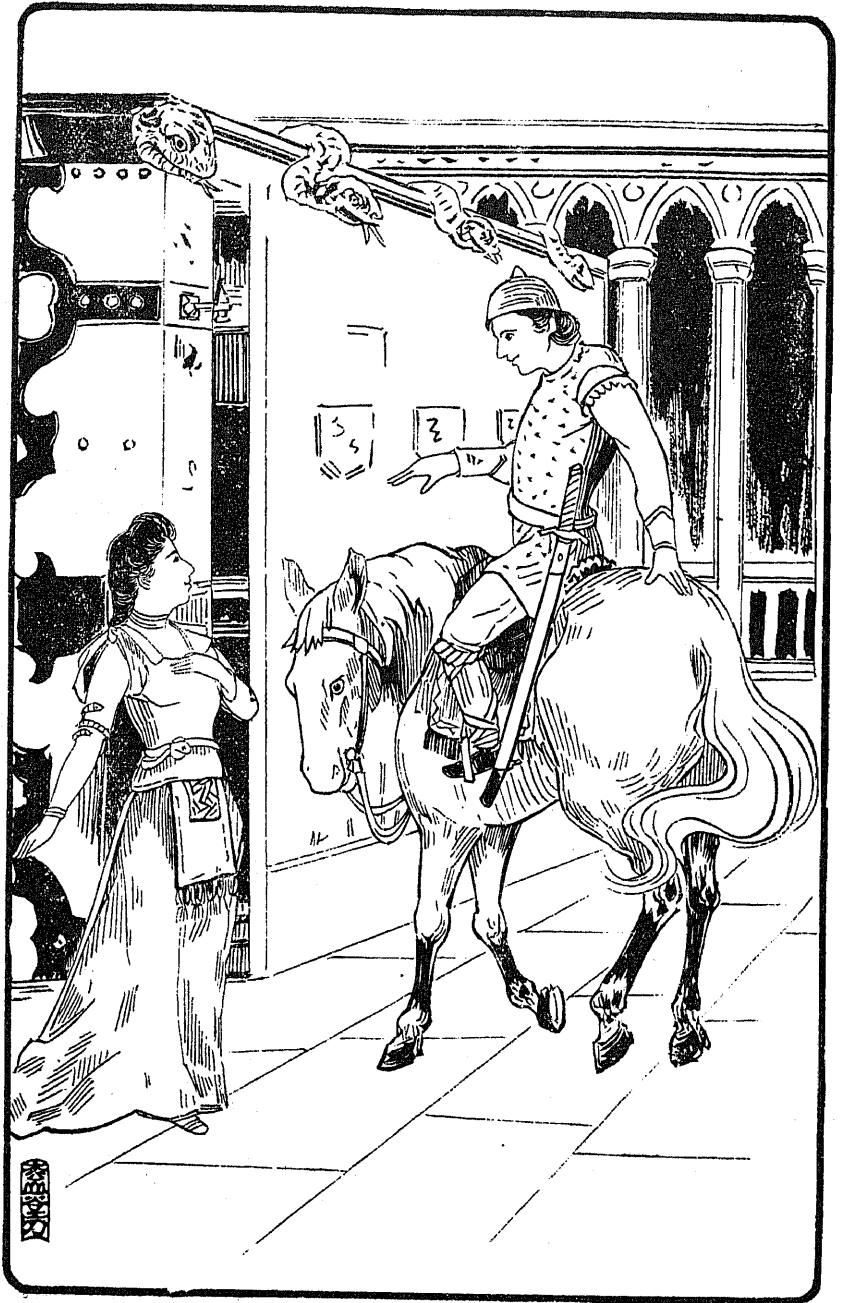
『お前の家てのは どこ?』と問ふと

『夫はね、私しが鎌首を向けるから、其方へお馬を進めて下さればいゝの』といひます。

四九内も、別にどこと行って、行きつくあてもないのですから、蛇のいふまゝに、送つて行く事にして、馬の前の所に乗せてやうて、一所に行きますと、蛇は鎌首をもつて、あちら、こちらと道を教へて行きます。

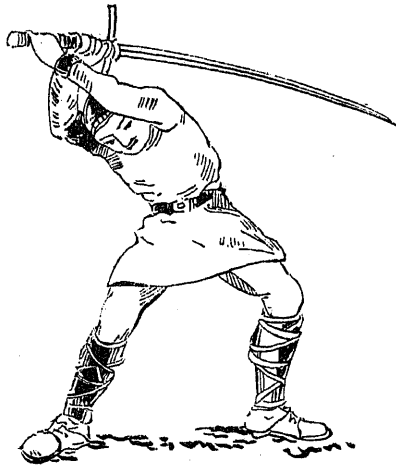
暫く行きました所が、とうく立派な門構のれ屋敷へ着きました。すると蛇は、馬から下りて

『こゝが私しの家なのよ、一寸、こゝで待つて居て頂戴な、私すぐ出てくるから』



といつて、門の中に這入つて行きました。

暫く待つて居ますと、門が又すーっと開いて、そこへ一人の夫は可愛いといつたら、又とない位可愛い美しいお姫様が出て來ました。そして、たゞ不思議だくと啼れてる四九内を伴つて門の中へ這入つて行きました。門の中へ這入ると、そこいらの立派な事！然し、四九内は、もう三日も食べないのですから腹が空いて、そこどこの騒じやない、『あゝ何か食べたいなあ』と思つて居ると、其お姫様が、おもしろい御馳走を澤山お膳に盛つて出してくる、『どうか、召し上れ』といはれるので、早速頂いて食べて仕舞つて、やっとお腹が出来た、馬はと見ますと、馬も最前から、御馳走にありついて居る。



やつと御飯がすんで落ち付いた所で、お姫様は、立派な劍を持ってきたてきて四九内に申しますには。

『あのう、私はさきの蛇なのよ、お前さんに命を助けて貰ったから、何かお禮をしたいと思つて、こゝまで来て頂いたの、夫

で、この劍はね、不思議な力のあ
る劍で、之を抜いて、敵の前で、
たゞうちふると、夫れ丈けで敵は
幾人でも、はたくと斃れてしま
うの、之をお禮に上げるから、お
前さん、この劍を持って、之から
お隣りの國へ行らっしゃい、丁度

戰爭が始つて、お隣りの天子様が勇士を招いて居るから、そこに行くくと屹度功名を立てることが出来て、お仕舞ひには、天子様の婿様になれるのですよ、併し、七年の間といふものは、決してく其劍のことは誰にもいってはならないのですから』といふので、其劍を四九内に呉れました。(つづく)



いそつぶ物語

其卅七 熊と二人の友人

二人の友達が、山中を運れて通つて居ると、忽ち大きな熊が道の真中に顯はれて來ました。すると一人は、いまなり側の木の上にかき上つて、枝に隠れました。も一人は、とても逃げられぬと知つたので、すぐ地面へ打ち倒れて、息をはづませて靜にして死人の様に、ぢつとして居ました。熊は側まで來て、此人の息を嗅いで見て、死人たと思つて、食べようともしないで、どこかへ行つてしまいましたが、死肉を食はないのが熊のくせだそうです。さて熊の姿が全く見えなくなつた所で、一人は木から下りて來て、戯れに、問ひました。

『熊は君に何といつて耳語て居たかね』

すると 友達はこう答へました。

『さうさ、熊は僕にこういつたよ、危い目に遭つた時、其友を見捨てる様な人とは、必らず一所に連れ立つものでない』

不運は友情の試金石なり

其卅八 尾を失した狐

一匹の狐が、陥穽にかゝつて逃げた事は、逃げたが、其代り尻尾を取られた、どうも自分ばかり、尾なしに居るのは、何だか見つともないし、可笑なものだと、いろ／＼苦心して考へた後で、よしよし、夫では皆の狐共に尾を切らせよう、すれば誰も彼も尾なしになるから、己一人笑はれる氣遣なしたと思案して、或日のこと、澤山な狐を、よび集めて、皆に尾を切つて仕舞ふことを忠告しました。『どうも、尾がない方が、形が見よい様だし

其に第一、あのふさしくした尾の重さがなくなる
 これは、全く餘計なものだからなわ」など、いつ
 て居ると、一匹の狐が、言ひますには、「然し、君
 が自分で尾を無しさへせねば、僕等に其んな相談
 はしないのでしよう」

其卅九 獅子の戀

一匹の獅子が、樵夫の娘をお嫁にくれといつて來
 ました。お父つあんは、無論獅子などに娘をやり
 たくはありませせん、が、夫かといつて、やらない
 と言ふのも恐いし、どうしたらいいかと考へて、
 やう／＼其計略を見つけました。先づ獅子に、た
 つた一つ此方の言ふ事を聞いてくれ、ば、喜んで
 娘の婿さんにしませうといひました、其一つとい
 ふのは、娘は、獅子の齒と爪とが大嫌ひだといふ
 から、どうか、其あなただの齒と爪とを取つて、し

まつて下さいといつたのです、そこで獅子は、自
 分の好きなお嫁さんが貰へることだと思つて、な
 わに此位の事ならといつて、早速其齒と爪とを切
 つて仕舞つて、さて、約束通りにしたから、娘を
 下さいと申し出た所が、今度は樵夫は、もう恐く
 はありませんから、いきなり太い棒を持つて來て
 森の方へ逐つ拂つてやりましたとさ。

お笑ひの種

三河境川水邊

近藤とき子

或る寺に三人の小僧がありました。三人とも仲々
 伶俐者でしたから、和尚も末頼母しく想ひ喜んで
 居られます。或日の事、檀家それがしから牡丹餅
 を九つ貰ひましたから、直ぐ和尚は、小僧を膝近
 く呼びよせ、小僧や、今檀家の内からこんな珍ら

しい物を貰ひましたで、一しよに喰べ様ではないか 小僧等「其れはかいしもの、では和尚さん早速喰べませう」と、直ぐ手をかける 和尚「イヤ小僧等待て、狼狽るな、狼狽る蟹は穴へ入らずの古言もある。其れに、一人りで二づ、喰べると、一ッ餘ると云ふ勘定、其の餘りの處置には此の和尚も頓と困まるて」小僧等「和尚さん其の處置には御心配は入りません、私しが喰べますから」と、各々聲を上げて嘆ぎます、和尚、實は餘りの一つは自分に喰べる積りで、餘りの處置はと問ふたのは、畢竟小僧等に「夫は和尚さんれ上りなさい」と謂はしめる計策であつたのが、案外に違つたから、大に失望手を拱ねいて居りました。彌々あつて、和尚「其れでは小僧、皆な喰べたい人許りであるから、切り分ける事にしよう、いや其れも餘り賤い様であ

るから、此の和尚が一つ歌題として、下の句即ち「きりたくもわりきりたくもなし」と云ふのを出すから、上の句甘く付けたものに與へる事にしよう」と、謂はれますと、小僧等は互に顔を見合せて居ました、兎角する内、兄小僧「和尚さん甘く出来ましたどうでしょう、

「玉手箱、硯に餘る筆の軸

切りたくもわり切りたくもなし」

中小僧「否や和尚さん、私のが些と甘いでしょう、」
「鶯の、踏み暴らしたる梅の枝

切りたくもわり切りたくもなし」

末小僧「和尚さん、二人りの付けたのは興味はありますが、活潑な處がありませんではないか、私しのが好うございませう

「牡丹餅を、吝じ和尚の生首を

切りたくもわり切りたくもなし」
と、さすがの和尚も、此の歌には吃驚感心、終に
余りを興へられたとぞ。

●英語入短話

久永重山人投

▲君コレハ九ツ(Nine)はナインですね。

▲此の様子では明日(To-morrow)は雪がツモロー

よ。

▲あの石(Stone)を落したらストーンと音がした。

▲此頃牝牛を(Cow)心組だよ。

▲あの河にはね君、鰻(Eel)の大きいのがイール

よ。

二千

●英語一口ぼなし ゆ き 子

職人の子父親に向ひ

子「お父つさん モーニクといふ英語を知て居
るかえ

父「ナンダ そんな事は朝飯前だよ

子「ぢやー イブニングは

父「エーうるさいな、晩にしようよ

●獨逸の考(もの)

▲私は終日出るいてゐるですが、夫でも家を出

ません、私の名をいつてごらん

▲私の知つてる所に、小さな白い家が在りますが

可笑しいことには、密もなければ戸口もありません、

ですから其家の主人の出でくる時は、い

つも白壁をたゞ破るのです

▲寒くなれば暖かくなり、暖くなれば寒くなるもの、これなわに、

●前號考へ物の解

- (一)太陽と砵錢
(二)月日と時計の針

●室内の遊び

皆様！我家で皆よつて、次の様な面白いことをしてごらん

(一)影探し「夜のお遊」

お座敷の一隅へ、白い布を引き回して置いて、影探の番に當つた子は、ちやんと其幕の方向に座つて居ます、決して後向いてはいきません、夫から此室には燈火が一つ入用で、夫は影探しの後につけて置く。

それから、他の嬢ちやん、坊つちやんは、出来るだけ風を分らぬ様にして、一人づゝランプと影探しの間を通つて、其幕へ自分の變な影を映らせるのです。

すると、影探しは、自分の則に映る影を見て、なるべく早く『誰さん』といつて、影の名を指します其時後向いたら、影探しは罰金を拂はねばなりません。

言ひ當てられた影の人は、代つて影探しの役をします。だから、皆さんは、なるべく變な風をして中々自分の影だといふことの知れぬ様にしなければなりません。

(二)目探し

これは、晝でも出来ず。矢張り一面に幕を引いて置いて皆が此中に這入つて隠れて居る。目探しの

番に當つた子は、幕の外に見張りをして居ます。すると幕の中から、一人づゝ、幕の真中の切口の所へ目だけ出すのです。目探しは、此目を見て「誰さん」といつて當てる、當てたら、幕の中へ這入らして貰つて、當られた人が、代つて、目探しの役になるといふのです。

目を出すときは、ほんの目だけで、髪だの口だのが見えない様になければなりません。やつてむらん、屹度面白いです！



家 庭



本篇は寺田先生が過般、大坂教育會に於てせられたる演説なり、家庭に取りても、學校に取りても、頗る有益にして趣味深く覺えたれば、同先生に乞うて、悉皆茲に轉載するの榮を得たるものなり。

吾人身体上の悲觀

寺 田 勇 吉

私は博覽會の用務を帶て大坂に參つて居りました處が高等女子教育部の諸君より何か御話をせよといふことでござりました、然るに當時種々の用務かござりまして、特に何か女子教育に直接關係を有つて居る御話しを取關べて申上げる余暇が

ござりませぬ、止むを得ず吾人の体格上の悲しき有様に就て御話しを申して見る積りでありますが折角女子教育に熱心なる方々の御集りでござりますから努めて、女子に關係の有る部分を申上げて見やうと思ひます、

諸君も定めし御承知でございませうが先達中東京の新聞に大に吾々の悲むべきことが書てありました、此は吾々日本人に對しては實に近來の大なる問題と謂つて宜からうと私は信じます、それは何であるかと申しますと、即ち明治三十五年度の徴兵検査の結果に依ります、其結果に依りますと、其壯丁の身長及び体重といふものは、年々歳々減少する之を一昨年即ち明治三十四年度の調査に比べて見るといふと、身長に於ては二分減つて仕舞つた、それから又体重に於て十二分減じ

ました、斯ういふことが殆んど各種の新聞に書てあつた、是は私は大に驚くべきことであつて、實に憂ふべきことであると思ふ、何となれば果して、徴兵検査の結果の如く、年々歳々吾々同輩の身長が小さくなり又体重が減ずるといふことであつたならば將來如何なる悲しむべきことか吾か日本國に起りますか、二分といふことは僅かでありませけれども、餘程吾々は講究して其原因を調べて、實際減らないやうにしなければならぬ、一寸した御話でありますか、諸君の中にも定めし御息さんがお有なさる御方が澤山ありませう、此子供の成長することは早いもので、去年拵へた着物は今年に短い、今年拵へた着物は來年は短かい、随分年々のことで厄介であります、併し若し今年に去年拵へた着物が大きい、來年は今

年拵へた着物か大きいといふ反對の現象があつたならば非常に吾々は悲しまなければならぬ、故に吾々の体重が年々十二匁減り、身長が二分減るといふことは却々容易ならぬことであります、若し何かの間違ではなからうかと思ひまして、陸軍省の徴兵検査に従事して居る友人に問ひました、然るに陸軍の當局者は辯して曰く、決して間違でない、實際徴兵検査にて取調べた結果年々歳々吾々の体格は悪くなるといふ斯ういふ報告を受けたのであります、御承知でありませうか、佛蘭西の國に之は似寄つたことがある、佛蘭西の人口は吾が日本國の如く矢張年々増殖して参ります其増殖する割合が年々減じて行く例へば假りに作蘭西の人口は本年は三千五百万であるとし、來年は三千六百万即ち百万人殖えた、其翌年は三千六百五十

二十四

万といふ工合に増加して行きまして増加する割合が年々に減つて来る、して見ると是から、何百年といふ後には一人も増加することのない、年が何年か一遍来るに相違ない、若し其年が來たならばどうであるか、即ち其年は増加の「ゼロ」の年である。其翌年は段々と人口が減るといふ方になる譯であるから佛蘭西にては大變に心配して居る詰りさういふ割合で行つたならば、佛蘭西は自然に滅亡して終らう、是は政治家のみならず、國民一般に深く心配して、此事に就ては原因があるからうから、其原因を取調べて佛蘭西の人口をモット盛にしなければならぬといふて騒で居ります、現に何れの國を見ましても、人口の増殖しまする國は家も新しく澤山に出來て國も益々盛なる國であります、人口の増殖する國、新築の家屋が増加

を示して居る、國は益々發達する國である是は統計學上争ふべからざる事實であります、佛蘭西では此事に就て種々其の原因を取調べて居りますが其原因の重なるものは、物價か段々と騰貴して來て、容易に人が結婚することが出來ぬ、容易に妻帯することが出來ぬ、又物價の高い爲めに、子供を以て貧乏の暮を爲し終日苦しむよりは、成るべく懷妊をしない工風をするが宜いと申して居る、殊に佛國にては婦人が自分で子供を育てると早く、年を取るといふことで中等以上の婦人は之を避くる爲めに乳母に小供を託し且つ成るべく子供を生まぬ算段をして居る、従つて墮胎といふ惡風が行れる、其外に御承知でもありませんが歐羅巴人の中で最も酒精を多量に飲用するものは佛蘭西人でありませぬ、歐羅巴にては、獨逸人も非常に澤

山「ビール」を飲みませぬ、男も、女も、子供も、頻りに飲む、併しながら獨逸の「ビール」は「アルコール」が至て少い、我國にて飲む所の「ビール」より少いから従つて害も少いやうに思はる、是に反して佛蘭西人は葡萄酒を水の如くに飲んで居る、是が子供の澤山出來ぬ所の一原因である、其他又生活の困難なる爲めに未婚の男女の數が非常に多く生涯人の妻となることの出來ぬ女子が澤山居る、是は佛蘭西許りではありませぬ、獨逸邊りでも六七十位の御嬢様が幾等もありませぬ、日本の言葉にては御嬢様と申すと皆若い女子許りを申しますが、歐洲にては六、七十歳のお姫様が幾らもありません、終身結婚の出來ぬものが澤山居ります、私は獨逸に居りました時に、或る家を訪問しました其主人が御嬢様といふから、日本

の所謂お嬢様と思つて居りましたが、實際は齒の脱けたお嬢様でありました、最初の中は随分奇異に思ひました、其原因は何であるかといふと結婚が六ヶ敷から終生人の妻とならずに獨身にて暮して居るものが多い、それから品行悪く私生兒が多い此私生兒は極めて多く死亡します斯の如き次第でありてそれには佛國にては心配して官民の區別なく頻りに、佛蘭西人口増殖の道を計つて居る、中には雙生兒三生兒を生んだものは獎勵金を給するがよい、成るべく餘計に小供を生まして、どうかして、獨逸と戦争をしても、敗けないやうにしたい、此儘にしては、遂に我國は獨逸國の爲めに取らるゝやうになりはしないかと、非常に佛蘭西では心配して居る

歐羅巴人と日本人との身長、並に体重の比較を

申しますると歐羅巴人は（無論丁年以上のもの）平均十七貫三百目ある、所か我國の男子の平均は（丁年以上のもの）体重が何程あるかといふと、十五貫目ある即ち歐羅巴人一人に就て、我國人一人に比較して見るといふと、其差が二貫三百目宛あります、身長は歐羅巴人の平均は、平均五尺五寸、日本人の平均は五尺二寸即ち其差が三寸である、西洋人に較べて見ると、日本人は少さく且つ軽い、ことは争ふべからざる事實である、歐羅巴へ行つても吾々は耻かしい事が多ひ、現に私は大きな耻をかけた、それは、何であるかといふと、英國の「リバブル」を出て、亞米利加に行きまする時分に餘程寒かつた爲めに、出来合ひの着物を買つて、行かうと、或る店に参りまして、出来合の暖い着物を見せて呉れと申しました所が番頭

が、宜ろしゆうございますと謂つて、案内した所が「ボーイ」の分類的部分即ち、小供の分類的の方に案内された、私も日本人の方ではさう身長の低い方ではありませぬが、それでも、小供の方の分類的に入れられたのであります、其部屋に這入つて見ると、吾々に適當の着物があゝる勿論我のみならず日本の書生杯の彼國に留學して居るものは、凡て小供の部屋に入れられるのである、殊に餘程日本の女子は小さい、幾ら立派の女である日本では思ひましても、外國の人の方が甚だ高い、日本人の婦人は殊に小さい、彼國に行きまして、不愉快を感じるのは獨り着物のみならず、手袋でも、靴足袋でも、「シャツ」を買つても何でも漢でも吾々の身体に適するものはない、杖などもさうである西洋で買った杖は杖いて歩くのでなく持つて歩か

なければならぬ、長けが二三寸も長いのであるから、善い工合に杖を持つことが出来ぬ、又外國人と一緒に散歩しまするに、外國人は「コンパス」が長い、外國人は一步に二尺五寸も歩くに、日本人は、二尺位であるから骨が折れる、吾々日本人は一時、外國人と競争して行くことが出来る併しながら長時間になるといふと、到底及ばない、とうも西洋人と急に同じになれといふことは出来ませぬが、吾々の身体か、年々歳々小くなるといふことは、大變なることである、獨逸人の如きは長き歲月の間に、文化の進むに従て、身長が、二分三分といふやうに増して來た、西洋人は大きい上に段々と大きくなつて來る、我日本人は小さい上段々と小さくなつて來る、實に悲しむべきものである、現在開港場に於て歐米人の水兵が亂暴する、

そこで日本の巡查が一人で抑へると云ふことが出来ぬ、二人も掛らなければ外國の一水夫を抑へることが出来ない唯に歐米人の水兵のみならず、支那朝鮮人でも、却々吾々より體格が宜い、日清戰爭の際に、随分日本人二人にて擔た荷物を朝鮮人一人で脊負ふて行た事もある實に悲むべき事であるそれで、此年々一人に就き徵兵検査の結果、二分宛減少するといふことは、假りに吾邦人の四千人と假定すれば一ヶ年に四十万尺減ずるのである、富士山の高さは一万二千尺である、其三十三倍からである、それ丈一年に吾々の身長が減つて行く、即ち凡そ我が里程にして、三十里許り減ずることになる、一ヶ年一人にては、何でもないやうでありまするが全國の人民となると非常なるものである

それから、目方は十二匁一人に就て減る、是も四千万人に計算すれば、四億八千万匁となる、それ丈吾々の目方が年々輕くなる、人間の目方の價は何位あるものだからは計算致し難いけれども、假りに金の價と同じものと計算して、一匁五圓と計算した時には、一人に付年々六十圓丈吾々の身體の量が減る、即ち全國にては一年に二十四億万圓の損である、斯ういふ大きなものになる、決して輕々と打捨て置くべき問題でない、無論實際必ずさうなるとは謂ひませぬが、兎も角も三十四、五年の徵兵検査に依りますると、さういふことになりませぬ、而かも、三十四、五年許りでない、陸軍省の公文を以て見ましても、年々歳々身體が悪くなつて來る、私は是は容易ならぬことであらうと思ひます、一年二分減る、十年二寸減る、

二百五十年を経過するといふと日本人は滅亡して
 了う、吾々五尺五寸の身體は無くなつて了う、ど
 うしても、今日の通りにして置くことは出来な
 い、身長の方からいふと、二百五十年の後には、
 日本の島は無入島になつて了う、唯臺灣人、琉球
 人「アイノ」の人種が残る丈であります、兎に角
 本洲は無入島になるといふ決定が出来るそれで今
 日では吾々の身體の有様が如何様であるかの事に
 就ては統計上の調査も不充分ながら、あるが、明
 治維新前には統計上の調査がないから昔の人の身
 體の模様は漠として分りません、併し私は諸方を
 巡回して、古人の肖像、兎、現に博覽會内の日本
 體育會にも陳列してあるもので、古い時代に用ゐ
 た所のものを御覽になるといふと、餘程、其具足
 が大きい、新田義貞の用ゐたる具足、武器があり

ます、是は國寶の中であります、其兎を今日の人
 が冠るといふと目か隠れる、頭も左右に餘程餘地
 がある其他、新田義貞のみならず其他の人の用ゐ
 たる槍なり、刀なりを見ましても、統計はあり
 せぬが今日の人が小さくなつたといふことを認む
 ることか出来やうと思ひます、或は人に依て、古
 の英雄豪傑は大きかつたといふ説を立つる人もあ
 りまするか、必ずしも英雄は大きかつたといふこ
 とは認むることは出来ないのであります、それで
 統計はないけれども、日本人の身体は種々の原因
 からして小くなつて来る、殊に今日は明かに統計
 の調査に依て斯うなつて居るといふを解る、し
 て見ると、日本人は段々小さくなつて、又従つて壽
 命杯も段々と短くなつて来る、西洋人は年々幾ら
 か大きくなつて參りまするが、吾々日本人は何程

宛か小さくなくては來るから、之を防禦する所の策を講じなければならぬ（ついで）

誕生日

我國ではひよつとかすると、親の誕生日や自分の誕生日までも知らない者がある位だから、まして友人の誕生日など、覺えて居る人は恐く少からうと、思はれる、所が、外國殊に獨逸邊りでは、誕生日を祝するといふことは、中々大切なことになつて居て、朋友同志互に、よく誕生日を記憶して居つて、其日になると、いろ／＼趣向をこらして送物をする、だからして、日本の留學生などがたま／＼友人の誕生日などを知らないで澄まし込んで居ると、彼の國人は、大變に之を不思議に思うのも無理でない。

此誕生日につきて面白いことは、各自の家庭で親の誕生日に小供が夫々趣向を凝らして祝意を表するのである。或ひは短かい詩を作つたり、美しい文章をかいたりして親に捧げる者もある、或ひは親の好きな薔薇の枝で樹架を作つて送る者もある、或は數週間前からピアノの一曲を稽古して其當日に之を奏しようとする少女もある、或ひは其當日の前で朗讀せんために美しいフランスの詩を暗誦する少年もある、親を愛する真情からの此贈り物や、己の才能を表はす所の質朴なる此趣向が親に取つては如何ばかり嬉しいことであらう、聞く許りでも、既に其當日の家庭の如何に趣味深きか、察しられる、此美風は、どうか我國にも移して、父の誕生日、母の誕生日、祖父母の誕生日、子供らの誕生日と、一年中の日を定めて、これ

を一家内の祝日にして互に祖祝し、相樂しむ様にしたならば、子供教育の上にも少からぬ影響を與へることになると思ふ。

某外國人曰く、日本人は家の内ではまことに行儀かやかましくて、外へ出ると往來でも、公會の場所でも、まことに不作法なのは不思議です。

昔いろは料理

石井泰次郎

(ひ)

蟹粉球の拵方

蟹の生肉を庖丁にてたゞきて細かになし食鹽、胡椒などを、程よく入れて、丸形にまるめて、蒸籠

に入れてむすべし

肥前長崎五もく飯

かしは、或は、なまりぶしを、細末にして煮上別に午房を細く切て、油にてわけて、煮上て、又別に、にんじん、しひたけ、こんにやく、何れも蒸上て皿にもるべし、さて外につゆを能かげんにこしらへ置右の五もくを飯の上のせてつゆをかけてくらふなり

ひしこ飯のたきやう

白きひしこをよしとす、竹べらにて骨をよく去て鹽水にて洗ひ、ざるにあげかき、さて飯は常の如くしかけて、飯のにえたつ時、右のひしこを入れてたきあげ、汁には薄醬油とて、醬油にかつを煎汁をませたるを用ひ、加料には干瓢のこまかにきりたる、又はしひたけのこまくを入れて煮るべ

く、又はちんびをおきわはせても出すべし。

山根醫學士曰く、疊は塵埃が溜り易く、随つてパチルスなども潛伏するに都合がよいが、板の間であれば拭へば直ちに清潔になる、我國人は雪隠を踏むだ足で歩み來り、其儘疊へ座り、物を食べたり頭を疊へつけて禮などをす、其疊へ近く頭を下げる程算ぶのであるから、全くパチルスを吸收する様なものである。

練乳の分析表 (婦人衛生雜誌)

種類	性状	水分	含鹽	脂肪	乳糖	蔗糖	灰分	分析者
米國製	帶黃	三、三	八、元	九、四	七、五	四、二	一、六	東京衛生試驗所
鷲印	白色	三、三	八、元	九、四	七、五	四、二	一、六	東京衛生試驗所
瑞西ネツ	スル製	三、三	八、元	九、四	七、五	四、二	一、六	前
スウイト	ス社人形	三、三	八、三	九、五	九、四	四、二	一、六	前
印(劣品)		三、三	八、三	九、五	九、四	四、二	一、六	前

以上舶來

日本一桃	全前	二、六	八、三	九、四	八、四	四、二	一、六	前
太郎印	全前	二、六	八、三	九、四	八、四	四、二	一、六	前
大日本	全前	二、五	八、八	七、五	六、五	四、六	一、七	全
軍人印	全前	二、五	八、八	七、五	六、五	四、六	一、七	全

内國製(全前) 二、五 六、八 七、五 六、六 四、七 三、四 全 前
印三ノ輪 以上日本

頭髮は温熱を導かないものであるから、夏は暑い太陽の熱を防いで、自然と頭痛や逆上を引きたげるし、冬は又寒風を防ぎ、體温の發散を妨げて、頭を温める役目をする、夫許りでなく、一體に頭髮は頭を保護して、人間の一番大切な腦髓に向つて、萬一の場合の豫防をして居るものである。然るに、我國の風習として、生れた子は必ず頭髮を剃り去ることにして居るのは、極めて愚な話だ。殊に驚風とか腦病などの兆候のある子供には尙更危險である。



情 緒

松本孝次郎

幼児の教育で尤も大切なものは情緒の教育であります。今このことを話す前に、一般に人間の感情教育といふものが余程大切なものであるといふことをお話しいたします。

人の感情教育は普通にいふ人物といふことに大關係があります。世間の人が彼の人は意地が悪いとか、大層偏屈だとか、氣の沈んだ人で相手になつて居ても面白くない人だとかいふのは皆其人々の持つて居る感情の發達如何といふことにあるの

であります。故に感情がよく發達して居らんと其人の幸福が少ないものである。何故なれば斯様な人は人にいやがられる。又人の仲間入をすることが出来ぬ、つまり一生不幸に暮さなければならぬ即ち其人自身に取つては斯様であるが、又これを他人の側から考へて見ると其仲間を失ふことであるから矢張不幸である。要するに感情のよく發達して居ないのは自分のため、他人のために損である、而して斯程に大切な感情を教育するのは如何なる時代であるかといふに、これは重に家庭の時代である、即ち感情教育は家庭の任務である。故に學校に於ては家庭時代に於て形づくられた感情をうまく處置するのである、凡て感情教育は智識より先に行はれるものである。高尚な感情は智識が發達して後でなければ起らぬものであるが、劣

等な感情は智識より先に進歩するものである。即ち情緒の如き低い感情は家庭に於て、親に由て形づくられるものである。又幼稚園に於て保姆に由て形づくられるものである。處が此の感情教育は實際甚だ困難である。何となれば幼児を育てる人が先づ自身で立派な感情を持つて居らぬと幼児の感情を立派に發達させることは出来ないのである例へば鐵を磁石にこすると、磁氣が鐵にうつて行く現象があります、感情教育もこれと同じで親なり保姆なり、持つて居る感情が幼児にうつるのである。

故に親や保姆が荒い感情を持つて居れば、幼児も自然に感情が荒くなり、之と反對に穩かな感情を持つて居れば、幼児の感情も穩かになるものである。

斯様に親なり、保姆なりの感情は幼児に對して大切なものであるが、實際左様に立派な感情を持つて居る人といふものは得難いのである。人は教育の力で幾分か感情を直して行くことが出来るものであるが、性來の性質は中々直すことが出来ぬもので性來氣短の人もあり、内氣な人もあり、氣輕の人もあつて、此等は皆知らずの間に幼児に影響して居る。實に感情の教育は六ヶ敷ものである。而して今日普通如何なる法をして、感情教育をして居るかといふに智識をもつてして居る。即ち親、保姆は其情を呈はして直接に教へるのではなくて、親に對してはどうあるべきものである長上に對してはどうあるべきであるといふ様に智識を授づけるのである。そして其結果各々自分で其情を起す様にして居る。偶々偶發事項のあつた

時には親なり保母なりは、それに對する情を起して、直接に感情教育をすることが出来るが、これは極々少い場合であつて普通は智識を授けるといふ間接の方法である。處が理屈は分つても、實際其情は起り難いものであるから間接の教育法は甚だ効力が少ない、しかし吾々はこれに優るよい方法を見出すことが困難なので効力の少ない間接の方法を以てでも大切の感情教育をせねばならぬのである。

情緒といふのは通例いふ喜怒哀樂の情である。或は恐怖、廉恥、愛情、同情、自尊、Hido、嫉妬、等である。斯様な情は極高尚な智識に關係して居るものでない。しかし斯様な情の起る時は智的作用が起つて快、不快を感じるのである。即ち快不快が一種の形を取つて表はれた場合が情である

情緒の一層高尚なものは情操であるが、これは眞善美の高尚な標準を見とめて其標準に訴へて快不快を感じるのである。故に此の情操は高尚な智識を得た後に起るものであるが情緒は家庭又は幼稚園で教育すべきものである。而して實際にあたる中々六ヶ敷ことが多い、例へば幼児が始終いたづらをする。初めの間は優さしく叱責して置く。處が度重なるに従つて、少しの叱責では効力が無い様になつて遂に罵詈嘲弄する様なことか起る。而してこれは、たとひ言語には呈はさずども幾分か舉動に呈はれて来る。こうなるゝ其親や保母の心持では幼児を直す積でも幼児は決して少しも直らぬ。何となれば度を叱責せられる事によつて、又罵詈せられる事によつて、幼児の持つて居る廉恥といふ情緒が亡びてしまふからである、幼児を

叱責しつせきした時にときこどもは一寸赤い顔かほをする。これは丁度適當ていどてきあつな度どである。しかし、度々顔かほを赤あかめさせたり。又ひとくすると段々だんぜんと赤あかめることが少すくなくなつて、遂つひには赤あかめなくなる、故に幼兒ようぢを叱責しつせきする時は其廉恥そのれんちの情けいを亡はろぼさぬ様に適當てきあつにしなければならぬ。又他の例れいでいへば幼兒ようぢが泣なく時に只之ただこれを可愛相かあいさうといつて慰なぐさめてよいか、又其の様ようなことで泣なくものでないと言いふがよいかといふと、これは發達はつたつの程度ていどによる、即ち幼兒ようぢ自身が自分じぶんで我慢まんすることが出来る様に意志いしが發達はつたつして來た時に我われは我慢まんさせる方がよいか、またそれ迄まできに達たつせぬ時は可愛相かあいさうといふて慰なぐさめてやるかよい、そして其その時に泣なくのをやめなと、言いはないで、黙だまつて、ほつて置くがよい。そうすると泣なくといふことによつて次第さいだいに苦痛くつうが滅げんして來て、遂つひには泣なき止やむも

のである。斯様かやうな時に泣なくなといはれると幼兒ようぢは之これを我慢まんする丈の意志いしか發達はつたつして居まらぬからために非常ひやうに苦痛くつうを感かんずるのである。しかし、意志いしが發達はつたつして來てからは十分我慢まんさせるからよろしい。かゝるときに、同情どうじやうを起おこしてさう痛いたいてわらうなと言いふと一層泣なき出すものである。又普通まふつうよく行なつて居まる事ことであるが、幼兒ようぢが柱はしらに頭あたまを打ちつけ泣なくとさなどに、殆ど柱はしらに罪つみがあるかの様に幼兒ようぢをして柱はしらを打うたせ、大人おとなも、また幼兒ようぢをたすけて、これを打うつことがある、これは柱はしらを打うつといふことのために幼兒ようぢの注意ちゆういがそれに轉てんじて痛いたみを減げんするといふことはあるか、これを情けいの教育けいよくの方かたから考かんがへると、自分じぶんの痛いたみを減げんするために罪つみのないものを打うつといふことは幼兒ようぢの將來せきらいのため、よろしくないことである、故に斯様かやうな場合には大人おとなが幼

兒の痛む所をさすつてやると共に幼児をして柱をさすらせるのがよろしい、そうすれば幼児は大に同情を養はれるのである。其他感情教育に關する斯くの如き例は度々起り易いものである。(つゞく)

奇妙な動植物 (つゞき)

田寺寬二

(四五)(六七)の結論

長々といろくの奇妙な鳥類について話しましたが、皆さんも己に於讀みになつて御承知の通りどの鳥でも皆雄ばかりが美しくつて、而もよい聲を發し、雌はまことに御粗末で啞が多いです何んと不思議な現象ではありませんか。

此が所謂雌雄淘汰と申すもので、つまり動物界では雌の數よりも雄の數が多いものですから、其

生殖の目的を達する爲めには勢ひ數の上からして雄は雌の歡心を買ふて其愛を得んければなりません。雌の歡心を買ふのには、自然其容貌色彩を美麗にして雌の注目する様にせねばなりません。乃で雄は或は美しい羽をつけ、或は異様な冠を着、或は美しくい聲を發する様に勉めるのであります。然し今鳥が其雌の歡心を得ん爲め白くなりたいたいと思つた處で、早速あの黒い羽が白くなる譯のものでもなく、幾らもがいても鳥の頭にカサドリの様な冠を直々着るといふことは出来ませぬ。

然らば孔雀の羽極樂鳥の尾の様なもの、何うして得たのかと申しますと、決して一朝一夕に得たものではありませぬ。ずつと昔の祖先が其生存上必要にせまられて、その羽色を變へるとか、いろいろな聲を發して、雌の注意をひく様にとつとめ

ましたのが、親から子に傳へ、子から孫、孫から曾孫……といふ様に、經驗から經驗、遺傳に遺傳、といふ風に遂に今日の様な美しい姿を得る様になつたのであります。だからこの様になる迄には、どれ位の年月と、どれ程の苦心とを積んだものかは、想像も及ばぬ位であります。

鳥類の雄の美麗な事に説き及んだ序ですから申しますが、熱帯地方の鳥類は雌雄に係らず。凡べて其彩色が花々しいです。

御承知の通りカナリヤ、とか、インコウなどは赤青黄白など、人が染め分けた様にうつくしいでせう、これは前に申しました雌雄淘汰とは少し趣が違ひまして、自然淘汰の結果なのです。

自然淘汰といふのは何う云ふ事であるかと申しますとこの世界の中に棲んでゐる澤山な動物は、

皆何の爲めに世に出て來たのかといへば、どれも其子孫を増殖しえうといふ考なのです。狐も犬も猫も馬も牛も羊も皆其子孫で以て、この世の中をうづめてしまはうと思ふて居るのです。

先づ何れ位増えるかと申しますと、一疋の鼠からして一年に生れる鼠の数は所謂鼠算で増まして八千に及ぶといふのです、鯉鮒は一年少くとも二十万、蠅は二百万、サナダムシなどは体中皆卵で充されて居るのですから、無慮一千五百億、アブラムシの如きは其産卵數丈發育したら、數年間にして全世界に充つる位に増えます。一疋のものでこれ位な増方をするものが、一種の中には何万何億といふ數があります。その何万何億といふ數がある種類がまた三十万余もあるのですから、もしも其子が悉く生長したら一日の中にも全世界に

満つる位です。

限りある世界に限りある食物を食ふて生長するものが、斯く大數が生存してはとて一日の日も覺束ない、そこで強者は弱者を凌ぎ、大は小を合すといふ生存競争が起るのであります。だから若しも周圍のありさまと少しも似てゐない形や色彩をしてゐたら、強いものが見付けると直ぐ食つてしまいますそこで、皆外界の事狀に適應しえうと勉めるのです。

全体熱帶地方は四時樹木青々として、いろ／＼の花が咲き綻び丹青を盡して居ります。ですからそこにすむ鳥類も自ら其体色をそれらの色彩に似せねばなりません。それで赤や青を取り交せて美しい色をしてゐるのです。

これが即ち自然淘汰の原理としては熱帶地方の鳥

類のうつくしい理由です。

話が随分他へ轉じましたがこれから後へもどつて肝心の話に入りませう。さて此次から申しますのは矢張奇妙な動物でありまして暫時昆虫の方に話を向けませう。これは次號に譲つて今回はこれだけ。

珠鷄の話

在三河安城 久永達倫

編輯『切日の切迫に近き、俄の思ひ立ちに『珠鷄の話』をものして、貴紙の餘白を借らん。

米國のポトリ、イガミン、Poultry Magazine. (家禽雜誌) から譯して書こう。

珠鷄とは漢名なので、英語はギユニアホール Guinea Fowl と云ふので、女子供にわかる様に言

ふならばホロホロ鳥といふたらよかるう。

で、此鳥の原産地は、亞弗利加洲なので、殊に同洲の東西部の海岸に澤山産するのであるが、現今は、歐洲各國到る處で蕃殖しない地は殆ど無いようになつた。

頭に角のやうな堅い冠を戴き、その色は淡灰色で、冠の下の方から嘴の上の方までは赤色、そして亦肉髯も同じく赤色、顔部と耳朶は含藍白色とも言ふて宜ろう、頸上に極小さい反毛がある。體は一寸見た所では、鶉に似てゐる羽毛は頸羽ばかり灰白色で、他は皆含紫淡灰色である。全体で、藤鼠の霜小紋を染出したやうである。で、脚は先づ淡紅褐色、嘴は灰黒色である。

他の鳥に比して、産卵の多いのには實に驚く、

殆一日も怠らぬと言ふてよい位である。或養鶏家の實驗によれば、僅々五ヶ月間に百五六十個産卵を得ること難きにあらずと聞いたが、是を以て見ると此鳥の頗る貴重であるといふ事がわかる。

孵化期は、五月下旬頃が一番よいので、雛の發生する日数は、先づ抱卵してから、通例二十五六日、大抵早くも二十七日をそきは二十八九日位經過せねば、中々發生しない (まだある)



史傳

大題小題二 (承前)

米 溪

サーモビレーの戦

戦は始まりぬ、衆によりて進むもの、争でか奮
 死の義兵に敵せんや。波斯の大軍、雪額をうつて
 逐ひ退けらるゝもの幾回、將校は鞭を擧げて軍を
 督し、箠て之を驅る。

憐むべし、波斯無辜の民、退ては味方の鞭頭上
 に閃めき、進みては希臘の槍刀眉目の間に輝く、
 槍の穂先に命を落すもの、海に逐ひ落さるゝもの
 泥土の裡に顛ずるもの、死傷數なく、大軍數々色

めく。然れども雲霞の如き敵兵、到底盡くべくも
 わらず。希臘人の槍は遂に折れぬ。刀は鋸の如く
 なりぬ。曉色既に明かにして、殘燈獨り明滅す
 るが如し、而して、レオニダス先づ屠腹して、自
 殺の桶を作りたり。

戦は愈劇しくなりぬ。屍の山、血潮の海、乘
 り越え、踏み超え、鋒鏖劍戟、右に靡き、左に
 漂ひ。矢叩びの音、馬蹄の響、煙塵高く捲て天日
 暗からんとす。ザーキジスの兄弟なる、波斯の二
 皇子も、遂に此處に斃れぬ、偶々軍中相傳ふ。ハ
 イターチス既に山逕を越えぬと。希臘兵の後方は
 塞がれぬ。殘兵今や全く囊中に在り。

スパルタ人と、セスビアン人は、胸壁内の小丘
 に退き、此處を最後の戦場となさんとせり。然れ
 ども、シーベンス人々に従はず、獨り波斯軍に投

じ、哀求降を乞ひしが、不忠不信と烙記せられて漸く命を宥されぬ。而して、奴隸は、大抵、此の時山上に逃遁せるなるべし。

而して決死の士、身を顧みざるの一隊は、陵側に立つて尙頻りに戦ひぬ。槍折れ、矢亦盡く。劍を抜て戦ふもの、匕首を振ふもの、徒手齒を以て敵に當るものあるに至り。日既に春くに及びて、希軍又一人の存するものなく残るは唯、蝟の如く矢を蒙むれる死屍の丘陵をなして横はれるのみ。紀元前四百八十年、葉月の片破月、獨り青し。波斯人二万、亦命を此土に委しぬ、ザーキジスデマラタスを召して問ふて曰く、斯かる精悍の兵尙は幾許かあるべきかと。デマラタス答ふるに八千を以てす。サーキジス胸中の苦悶知るべきなり。

サーキジスは是に於て、艦隊より廷臣を招き、彼に對しては、假令、勇敢なる戦をなすとも、遂に斯の如くなるべきを誇示せんが爲、十字架に縛せられたる、レオニダス及び、スバルタ人の死屍を示しぬ、ザーキジス、始め、一千人以上を屠殺することを禁じたりしに、今是の如し、蓋し此の一擧の如きは、其の精神の昏衰によるにあらざらんや。

勇敢なる王の死屍は、他の戦死者と共に、其の陣歿の地に葬むられぬ。

アリストデマスは、病によりて戦場を退きしが總て、彼の土人士に齒せられず、唯卑劣漢と呼びて、其の名を稱するものもなく、一把の大、一掬の水をも恵むものなかりしかば、徒らに、死者の英魂を羨みしが、其の後一星霜、波斯軍最後の侵

入に於て、最も見苦しき失敗に歸したる、プラチ
 ーアの戦列に加はり、勇敢なる戦をなし、以て漸
 く其の汚名を雪ぎぬ。

國難全く攘ひ盡して、希臘の半島、再び平和の
 謠、長閑なるに及び、國人、皆、蕞爾たる半島の
 運命を双肩に擔ひて、潮の如く侵入せる外寇を支
 へ、地中海頭の小邦をして、泰山の安さに居らし
 め、一死國に殉じて、英魂尙生けるが如く人心を
 照らせる、壯烈なる忠死者の爲に、吊魂の誠を致
 さんとし、此の偉蹟をして、永く國民の念頭に新
 ならしめんが爲に、圓き標柱二を此の地に建設せ
 り一基は胸、一基は、胸壁の外に在り、此の地、眇
 たる孤軍克く波斯の攻撃を退くるもの兩日、戦
 最も激烈を極めし所。以て全軍の精忠を表す。銘
 に曰ふ、

ヘロップの兵四千、此處に、敵の三百萬と勇
 敢なる戦をなしぬ。

他は、スバルタ人の表忠碑なり、銘して曰く。

通行く人よ。冀くば、行てスバルタの人に告

げよ。命を守りて、我等は此處に斃れたり。

最後の戦をなしたる丘上、石獅の像を安ず、乃

ち勇猛獅子の如しと呼ばれたる、レオニダスの紀

念碑なり。

歲月悠悠運りに流れ去て、石獅標柱已に既に其

の影を止めず。サーモビレーの勝形、亦桑滄の變

に迹を失ひ、デタの山脉と、曲江の間は、陸地相

接して、温かさ泉の名殘今將た尋ねんよすがもな

し、否々、獨り、銅柱と石獅とのみならず、兵士

の夢の跡、吊はんとするも、夏草の茂みの其處さ

へ定まらず思束なきも、唯、レオニダスの名は、

異つ國のはし／＼迄、薰らぬ隈もなく、星霜茲に
二千三百有餘年、波荒き磯の邊りの木の下に、英
魂長へに眠れるも、精靈宇内を照らして、人心を
鼓舞するもの果して幾許すや。(完)

附言 大題小題なる名の下に誠に断片的の材料を蒐集し既に此
の紙上に掲載せるものも数次なるか少し思ふ所もあれは一先
此の稿は此處に筆を收め機あれば別に題を改めて相見ゆるこ
ととせんとす請ふ諒せられよ。



わが里

佐々木信綱

水車ゆるやかにめぐり
にはとりはがらかにうたふ
あらしの聲きこえず
ねたみのちりもこゝにこず

のどかなるかなわが里
門をめぐるいさゝ川
流ゆるく水きよく
底の小魚も數ふべし

じづかなるかな我やど

まどの柳枝たれて

とほき牧場の牛のこゑ

近き林の鳥の歌

昔のよそひ引きかへて

やつれしきぬをまとへども

いとし子いだくわが妻の

おもわにみてもゑみの色

われはやぶれぬ人の世の

あらさはげしきたいかひに

されども得たりこの里に

清き平和となぐさめを

海

七つ八つの海士の子が

濱の眞砂にいけほりて

堤さづきて水ためて

遊びながらのひとり言

小花 清泉

『大きくなれよ強くなれ

大きくならば我も亦

海原とほくこぎいでて

わまたの松魚つりあげじ』

磯邊の小松とし毎に

春のみどりの色かへで

大きくなると諸共に

彼も大きくなりにつけり

かれの望はとげられて

今日のりぞめの松魚船

武士の子の初陣うしきんに

いでたつがごと勇ましや

右に左に四人づつ

八人の人のこぎゆけば

舳先にさはるものもなし

山なす波も波ならで

「心して行けさらばよ」と

いひて別れて見送りて

母はかくこそ思ひけれ

『あの子生れし年の夏

今日のごとくに船出して

行へ知れずの身となりし

あの子の父に似たるかな

日笠かぶれるあの姿』

小さき魚

日ごろへだてぬ

したしき友に

星かげあはき

ともに涼しき

す み

まなび舎の

誘はれて

夕暮を

小川べり

れ

むかふの岸に

波のまに〜

ちよろ〜と

群れてゐる

つみなさき魚を

おどろかす

青葉のかぜも

おかしけり

徒然草を讀みて

あ ふ ひ

並岡の法師のつれづれの心やりに書きつけいん、徒然草こそ、いとたふときふみなれ。そのはじめは、人に見せんとての料にはあらざりけめど、學力ある人の、世を憤り志を述べたるにて、文さへいと妙なれば、おのづから世にもはやされ、後の世の人、つれづれなるをり、あるはさらぬをりにも讀みあぢはひてめで來つるなり。隨筆物としては枕草子につき、註釋の多きことは、源氏物語につぐといふ。

此法師は、大織冠より十九世の後、吉田兼顯の子にして、はじめは兼好として後宇多院北面の士にして、左兵衛佐なりしが、院崩御の後、やがて遁世して兼好法師と呼べり。歌の口つきいとめでたく、二條家の門弟にて四天王と呼ばれたりとぞ。出家して後は、並岡にも住み、また伊賀國見山にもかくれけるとかや。家集に、並岡に無常所まうけてかたはらに櫻をうまさせて、「ちきりおく花とならひの岡の邊にあはれいくよの春をすくさん」と、あるを見れば、庵のほとりに櫻などうまてたのしまれたるなるべし。後村上天皇正平五年に、年六十八にて身まかられたるよし諸書に見ゆ。

兼好法師は、まことの世捨人のことく、みづから書きなしたれども、さにはあらず、そのかみ有名の慷慨者にして南朝の忠臣なりしなり。あるは資朝卿と心をあはせて北條家をうかばんとし、あるはこゝもまたうき世なりけり、と國守のたのしみにふけるを怒り、南朝より召さるればとるものもとりあへず馳せ上り、北朝より召さるればいなびてうけざるなど、其行を、しともを、し。さて、學は、と聞へば、天台の學に達し、かつ儒教を學び、殊に老莊の道を好みりとかきく。

徒然草は、實に此を、しく學力ある人の隨筆なり。其主意は、人に見せん、とにはあらで、つれづれなるまゝに、心にうつりゆくよしなしことを書きつらねたるなり。されば其こと一ならず、神道あり、佛道あり、老莊の道あり、儒道あり、歌道あり、武道あり、さては世上の奇談色情のことなどさへ記せるなるべし。讀みゆくに。文体は平安時代のものにならひたるに似たれども、しかもたゞやはらかならず、佛語漢語をもまじへやさしき中に氣節あり實にたげくしてやさしく、やはらかにしてを、しきところ、此法師獨得の長技といひつべし。其議論は、佛説を主として老莊の道を參酌し、孔孟の教を混用せり。其立論の愉快なる、意味の高尙深遠なること、及ぶもの多からじ。其全編の精神は、俗情雜念を去りて清淨ならんことを願へるがごとし。

このふみ、今こそはかしましく世にもてはやせども、そのかみ法師のものせられしをりには、後の世にかかれ、とほなどか思はん、只無心に何となく書きすさびしものならんと思はる。さるを後世こをもてはやすにつけ註釋も多くいできて、れのくおのが

好める道にひきつけてあげつらへるものいと多し。強て教訓の書とせん。などいふことはかの法師の本意にはあらじとぞおぼゆる。

このごとく、徒然草はなしへにとてつくりしふみにあらねば、エみもてゆくにげに情理にそむけるところなきにしもあらず。かつ佛をたのみ、後世を類はんがため。君も家もすてよ、親も子もわすれよ、といひたるなど道徳上より論ずればうれしからぬふしも多かり。されば讀みて却て害となるところなきにしもあらず。讀むもの心すべきふみぞ、とこそおぼゆれ。

徒然草を讀まん、とならばしかるの心もちひせよ。と師の君のたまはせしみことばをかしくまりつゝ、エみゆけば、げに慷慨者の世をいきどほれるもしるく。あるはひじりの御代の政を忘れたるをそしり、あるはとものみやつこの御製を恥し奉りて人心のたのみかたきをとけるなど、其頃の朝廷の御様も忍ばるゝこゝちぞする。月花をさのみ目にて、とあげつらはれたるいとをかしく、をりふしのうつりかはりをおもしろくかきなされたるはいとをかし。

このほかとりておのがいましめとすべきところいと多く、讀みあぢはふに従ひ、ますく其心ふかきの忍ばれて、かの法師のひとりともし火のもとに、いにしへのふみを友としけんさまもおしはかられていとあはれになん。

徒然草をエみて思ふことやもいと多し。こよひしもつれづれなるまゝにそがかたばしをかしくはものしぬ。

説林



幼稚園の立場と其の務

森岡常藏

わたしは、数日前中村さんから何か話をせよと云ふ御話で、其時に御請けは致して置きましたが、忙しいと云へは誰も遣ふ言葉でありませんが、眞實に忙しいと云ふ事もありませんし、又私は餘り幼稚園の事に就ては材料を有つて居らぬのであります、日本でも餘り幼稚園を參觀した事もありませぬが西洋へ行つても餘り澤山見た事はありませぬ。殊

に或る部分は私が御話をするところではなく皆さんから御聞きをせねばならぬことであると思つて居るのであります、又此れまで皆さんから段々御話があつた後でありますから私が言ふ位な事は既に御話になつて居らうと思つて甚だ不安心の儘出て来た事でありませぬ、或は屢々御聞きになつた後かも知らぬが少し御話をして、幾分なりと皆さんの御参考になれば幸と思ふて居ります。ドウ云ふ事を御話しやうかと云ふことは前から極めて居りませぬで、漸く少し前に此話をしやうと云ふことを極めたやうな事で、幼稚園の立場は如何なるものであるかと云ふ事を、歐羅巴の二三の學者の説、それから私が見ました所で、幼稚園に如何なる事を務めて居るか、其の二點に就て簡單にお話して置きたいと思ひます。

私は幼稚園は餘り見ませぬでしたが私の長く居りましたエナで一つ二つ見た事がある、又伯林でも亦二つ三つ幼稚園を見た事があります、巴里でも一二ヶ所見て參りましたから、それでドウ云ふ事をして居ると云ふ事を言ふは獨斷かも知れぬが少し御話をしたいと思ひます。其の前に言ふとはフレーベルが幼稚園を拵へた趣意は皆さん御承知の事でありまして、其のフレーベルの哲學思想と云はうか教育に對する根底の考へに就て昔から能く人が言ふです、一の神秘な考へがあつてそれから出て居るのである。フレーベルは本當の哲學者でないと言ふことを人が言ひますが、こゝに持つて居る本にもありませんが獨逸のババリヤのミュンヘンの哲學の教授フローンヤンメルと云ふ人があるが、此の人はフレーベルの根底の考へから一步深

く進んで研究してその哲學の根底を委しく調べたのであつて此の本は其研究とフレーベルの考へとを比較した本であります、其の事は今は申し述べぬでありますが只フレーベルの根底の考へを詰らぬ様に言ふけれども、一方からそれを深く研究して居る人もあると云ふことを言つて置きたいと思ふのであります、幼稚園の職務は何であると云ふことは言ふまでもなく、學校に這入る前の子供の家庭教育を助けそれを補ふて身体を規則正しく練習し、精神を自然に適ふて居る陶冶をするが趣意であると思ふ。それはフレーベルの考へで生れて來たものであつた………詳しく言へばフレーベルから出たと云ふ譯ではありません、それは言はぬでも御承知のコメニウスの説いた中に母學校と云ふ事がある。………フレーベルは兎も角も珍ら

しい考へを出したのである。其のフレイベルの考へは獨逸で餘り流行せぬで、却て外國の英吉利とか亞米利加とか佛蘭西に榮えて居る。今でも其の現狀でありまして、獨りフレイベル時代からのみならず今でもそうで、獨逸は佛蘭西や英吉利に比べれば盛んでない。それはドウ云ふもので本國即獨逸に其の考へが盛長せぬかと云ふことは御承知でもありませんが簡單に申すと、立場を話す道行さでありますから申しますが、それは千八百五十五年八月七日であるが普西亞の文部大臣のラウメルと云ふ人が訓令で幼稚園を禁じて仕舞ふた。其の考へは幼稚園はフレイベルの社會主義、フレイベルが社會主義を有つて居て幼稚園は其の組織の一部である、其のフレイベルの社會主義が無神論であつて、無神論に子供を導く様になるから危

險なものであるから禁ずると云ふことを訓令したのである。其の訓令に就て或人はフレイベルの考へが宗教に反して居る事を説明する人が無いのでないが、想ふにラウメルと云ふ大臣の誤解したから起つたのである。其の時分社會黨のカールフレーベルと云ふ人があつて、其の人は社會黨であつた、此の幼稚園を立てましたはフリードリッヒフレイベルである。其の人と社會黨のカールフレーベルと一緒にしたもので、其の誤解から來たものである。併しそれは先づ其の大臣がさう考へたが間違であるのであります、大臣の訓令になつた者であるから一大打撃を被つた譯であります其後に實際の方面から研究してフレイベルの立てた幼稚園に就て起つた非難が二つあるのである。それは幼稚園の唱歌、始めて出來た時分の唱歌が

非詩歌的である、詩的でない、又子供らしくない唱歌である。それと結び付けて幼稚園と云ふものは子供の取扱ひ方が餘り人工的になつて居る、餘り細工を仕過ぎる。餘り種々の細かい方法で不自然な事をやるものであると云ふ非難が獨逸に起つたのである。それは幼稚園の起つた初めは實際さういふ事があつたのであつて、保育の任に當つて居る人がさういふ風に人工的にやつた、不自然的にやつたと云ふ事があるのである。小學校でやる様に保育したのである。我國でも少し前までは我國の幼稚園に對して教育者がさういふ考へを起した事があらうと思ふ、餘り不自然的に餘り人工的に走るから面白くないと云ふ考へを有つて居る人があることを信じます。それはとに角其の非難たるや幼稚園の主意の罪でない。幼稚園と學校と混

すべからずと云ふことをフレーベルは熱心に戒めて居る其の非難は保育の方法の罪であつて幼稚園の罪でない。

其の次にモウ一つ非難がある。これも幼稚園の立場から起つたもので、幼稚園の立場と云ふ所から起つたものであるが、其の非難は随分有力であらうと思ふ。家庭といふものは一切の陶冶の源になるものである。家庭は即ち第一の自然の必然の教育所であるべき筈である。幼稚園は家庭の權利を侵害して居るのである。母が殊に其の子供を育て上げて子を見るは母に若かず母ならば一番能く知つて居るから母が子供の性質を呑み込んで其の子供を育て擧ぐへきものである。幼稚園は其の家庭の權利を侵害して居る。さういふ幼稚園の起るからして父母殊に母が義務心を失ふて仕舞ふと云ふ

事になる。幼稚園のしごとは母のすへきものであつて、それを幼稚園のするのは家庭のする事をし居る様なものであると云ふ非難かござります。さて幼稚園に對して現はれた非難は此の通りでありまして、其の中にも後の方の非難は有力であるかと考へます。實際子供に對して母は自然の教育者であるとして云ふは否ひへからざるものである。若し幸福な家庭で母の自然の愛情に依つて、且つ母が子供を誤解することなきに依つて其母が子供を教育したならば一番自然で一番良好なるものに相違ないさういふものならば、幼稚園の設立を必要とせずと云ふ理由が立つてあらうと思ふ。けれども何れの家庭も幸福な境遇にあると云ふことは出来ぬ特に父母が共に職業に従事して居るとか、或は勞働に従事して居るとか云ふ様なことであつて、

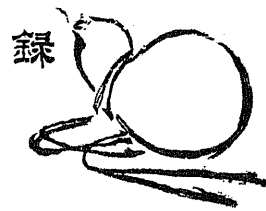
子供を育成陶冶する爲め骨を折る時間のない時、父母は稼ぎに出で子供は棄てゝあると云ふ時は幼稚園設立の必要を感じる事になる。其の點から言へば幼稚園は必要になる。それは眞理であらうと思ふ。其處で曾て私がシルレルと云ふ人の説を「教育」に紹介した事もありますが、それにも書いてあります。幼稚園は富豪家の子供の爲めに必要ではない。富豪家の子供が幼稚園へ行つても非難するには及ばぬが、彼等は家庭で充分世話を受けて居るのであるから、ソンの幼稚園を必要とせぬ。幼稚園の必要は村落とか貧家の子供に最も必要なのである。シルレルは獨逸の村落とか貧民の澤山居る町に幼稚園は殆んど稀れてある……獨逸は公立の幼稚園はない悉く私立である……それを嘆きさういふ貧民の多い所村落などに必要である

富豪に必要のない、其の證據としてシルレルか子供
 の心理研究の結果を擧げて居る。其の言ふ所に
 據れば二十四人はかりの子供を試験したか、それ
 は何れも下層人民の子であるか、其の結果を見る
 に話の力か不充てである、「私は學校に居る」と云
 ふ簡單な語を教師か助けずに完全に言ひ得た者は
 一人もない。けれどし父母は稼ぎに出て子供は家に
 居る。そして子供の發達の上に世話をせぬ。故に言
 語か發達せぬ、又想像力に就ても意思の發表に就
 てもさういふ現象か現はれて居る。それを見ても
 貧民の子供、殊に下層の人民の子供に幼稚園を起
 す必要があると云ふ事を言つて居る。ジャンポー
 ルが言つた様に子供の初めの三年の經驗は後に大
 學に行つて三年の修業よりも學ぶ事が多い。殊に
 二歳から八歳までの發達は大なるもので、其の點

に於て注意を缺く事があれば少なからぬ不利益を
 遺すてあります。それ故にシルレルは幼稚園の立
 場を考へまして、今言つた様に貧民の多い町とか
 云ふ所に幼稚園を起すべきである、そのことにつ
 きて佛蘭西か一番能くやつて居る。さういふ所に
 は佛蘭西は殆んど公立で幼稚園を建て居る。そ
 れを學ぶべきであると云つて論結して居ります。
 今言つたは貧民の子供と云ふ事を眼中に着けたの
 であります、金持の子供に不必要かと云ふに金
 持の子供ても友達同志一所に學校に行つて保育を
 受ければ、其の交際の間又保母に接する間に心の
 發達か出来るから、それか出来れば實に結構であ
 ると言ふことは出来ます。シルレルの考へは右の
 通りであります。〔つゞく〕



雜



録

幼稚園案内(承前)

東 基 吉

保育の方便

幼稚園保育の要旨は、大略前號記述した通り、次に、此要旨を遂げて、よく幼稚園保育をして教育全體の目的に適合せしめんが爲めに取る所の方便は何かといふ問題を解くのが順序だと思ふ。尤も此方便といふ語には、いろいろの意味が含まれる、例令ば、園の設計なども其一と見られるが、

こゝで方便といふのは、専ら幼児を保育する爲めに、保姆の取る所の手段をいふのである。

幼児保育の手段として、遊戯を利用するに至つたのはどうしてもフロエベル氏である。遊戯の教育上の價値を認めたる人は、勿論前々々の教育者に、幾人もあつたには違ないが、然し實際遊戯を用ひて幼児を教育する計劃を系統立て、且つ之を實行したのは、フロエベル氏が始めである。

そこで、こゝでは敢て遊戯の理論や効能を説くではないが、たい此時代の幼児保育の方便は一切遊戯を用ふるのだといふことをいふのである。つまり、幼稚園教育の性質は、外部から多く與へてやるのではなくつて、フロエベル氏の言つた様に、幼児の自己活動力を働かせて内部に存在して居る諸力の萌芽を正當に發達せしめるのであつて

遊戯は此自己活動力に満足せしめる殆んど唯一の
 方便で之で以て、幼稚園主要の目的たる身體の鍛
 練を得させるは勿論いろ／＼な心力の發達の資に
 もなり、且つ道徳上い、習慣も與へる便にもなる
 のである。

幼稚園の保育は最初から、遊戯が其主要の方便
 として定まつたものであるに、とかく世間の親た
 ちは、近慾ばかりねらつて幼稚園で何かを學ばせ
 様／＼と望み、又幼稚園の方でも、其望に應じて
 読み書き算術を教へたり、夫でなくつても、無暗
 と、智識を外部から注入することばかり考へて、
 此主要の方便たる遊戯をどう利用すればよいかと
 いふことを余り考へないといふのはよくない事だ
 と思ふ。

勿論、幼兒は一体遊戯ばかりするものでない、

いろ／＼の活動をやつて居る、例令は談話をした
 り聞いたり、歌を唱つたり、其他いろ／＼の仕事
 をして居るのは、誰でも知つて居る、だから、幼
 稚園でも、たい遊戯ばかりやるのではない、遊戯
 と名のつく事の外に、談話といふものを語て聞か
 せたり又咄させたりもし、唱歌も唱はせる、其他
 細工もの、様なこともやらせる、之等も無論、保
 育の方便として用ふるものであるが、然し之等の
 方便を用ふる其の精神といふものは、遊戯にある
 のであつて唱歌でも、細工などでも、勤勞といふ
 形になつては行かないのである。なぜかといふに
 此時分の幼兒の心身諸力は、眞面目に勤勞を課せ
 られるには尙餘りに微弱なからである。

(つづく)

鹽津みやげ(その二)

和歌子

●七月のある日、昨日鹽津に着いたをばさんは、朝から荷物を解き出して、まづおみやげをズラリ並べてそれ／＼に渡す。千代子(六年六ヶ月)と英夫(四年二ヶ月)は踊つて喜ぶといふ賑ひ。やがて此二兒に清子(七年九ヶ月)文子(三年二ヶ月)きみ子(一年六ヶ月)を加へて五兒を引連れて、濱近き小高い地にある神社に遊びに行く、社内には處々はげそうになつた昔の繪や、當世の石版摺などが額になつて掲げられてある、中には畏くも、貴顯御騎馬の御尊影、和蘭の女皇陛下の御肖像の石版摺までも掲げ奉つてある。さて何時も此社に遊ぶ千代子は、之等の額に付て町重に得意に説明をするので、昔の祭禮の行列の畫を指して、「コレハ葬

式」などと言つて呉れる、一体をばさんは鹽津に來たのは今度をはじめたので、千代子は進んで、道案内其他諸事説明の任に當る。こゝは豆腐屋、こゝは網屋、こゝは八百屋といふ事までも、其家々の前に立ち止まつて教へて呉れる。社に居る間、千代子の友であるおとみサン花チャンの二兒が加はり、きみ子を膝に、六兒を前にして、ジョーシヌと鼠の話をかかせる。石壇に腰掛けた兒達は、目を丸くして耳を傾けて居る無心さ！、やがて雀や蛙の歌を皆一緒にうたふ。幾度となく石壇を上つたり下りたりする。

●又ある日、毎日の定のやうに大人と子供と六人連で岡のあなたの濱に海水浴に行く。毎日わざわざ海水浴に出かけるのは全村で吾等の一族ばかり従て此濱はまるで獨占のありがたさ。静かさ。見

渡せば淡路島遙か向に低く青く。和歌の浦は目近く前に控えて白沙青松呼ば、答へさうな景色の好い所なので。大人の心も廣々する。兒等の活氣は層一層でチャブ〜と跳ね廻る。バタ〜と泳ぐ浪に倒され潮を被つてはキヤーキヤー喜ぶ。「ラバサンヲヨグノヘタヤ〜」「ア、アンナ遠イトコヘヲヨイテイタ」など、口々に言ふ子供のを耳にしながら、大人もそれ〜泳いだり浴したりして居る少時すると子供の爲に海水中に立てた赤旗を抱へて大人が皆上陸したので、子供も一緒に來て砂遊びをはじめ、石ころも貝も御望次第にころがつて居るので、之等を集めては一生懸命に山、池、川、海、庭、橋、などを作り、非常な興味と熱心をもつて居る。大人も此工事を手傳つたり顧問になつたり、高い處の草花をとつて

來る役になつたりして居る。大小六人が砂遊びに餘念もない外には、此濱には一人一人の影も見えぬ六人の聲の外には静に寄せる浪の音ばかり、立つて居るものは山ばかり、涼しい濱風は濡れた海水浴衣にこゝろもちよくわたる。實に浮世の外である。此平和な時平和な處に一事件が起つた。といふのは外でもない。清子のこしらへた山の上に、をばさんが「コレハ人ナンデスヨ」と言ひながら小石を歩かせた處が千代子「コンドハアタシ上ツテ見ル」と言ふや否正眞に自分の足をかけたのでサーたまらぬ山も谷も木もメチャ〜にこわれ、さながら山崩の体なりで、清子は大に腹を立て千代子が故意とこわしたと見たので、それこそアナヤといふ間もなく、直ちに千代子の山を踏みにじつた。こうされて見ると千代子も怒るといふ

ざはぎ、英夫一兒は局外中立、アツケにとられてつゝ立つて居る。今のは千代子がをばさんのまねを實際にしたのでこわさうと思つたのではなかつた云々、とをばさんが證言するやら、訓へるやらで、事落着、忽ち雨晴れ風收まつた体で、双方元々の笑顔にかへり、またセツセと修繕するやら新に山を築くやらの大工事。家に歸つてけふの此騒動を語ると家内中大笑をする。當局の清子と千代子も、他兒の事かなんかのやうに笑つて居つた。

●又ある日。をばさんは清子、千代子、英夫の三兒を連れて買物に行つた。まづ海水浴をする時の爲に麥藁帽を買つた處が千代子は、其をばさん自身のであるといふ事を聞いて、「アレマー女の大キナ人ハシヤツポカブルモンヤナイワ」と頻に笑つ

居つた、次に下駄店に入ると、二女兒は熱心に「アレニシナー」「コレニシナー」と横合から擇んで居つたが、遂に或粗末なのに定めたのを見て「ソナノカイナ、アレニシナーエ」と店中で最も美はしく見えるのを指して居つた。さて主人が花緒をたてる間、英夫は例の目を圓くして注視して居つたが、でき上ると同時に「上手ヤナー」と感嘆した二女兒は店頭に立つて遠慮會釋なく其邊にわる下駄雪駄の品評をはじめた。まづ「アレハエー」「コレハイカン」「アレコーテホシー」「アレキレーナ」よりはじめて、過去の履物に關する諸記憶を思ひ出して語り合つて居る。千代子の雪駄談がふもしろい。「アタシモーセンドセキダコーテイタ、イタワエー、ソレノシ表切テ裏木デノ、コナイシユー」ナランデアツタワエー、ホイタラチットマハ

イタラ、ボキツテラレタワエー」といかにも其時の惜しさを思ひ出したやうに、左の手の指を並べて見せる。板草履の形容なのである。歸途に木綿店に寄つたらば。又其店頭でも布の品試があつたさて色々の買物を一ツづゝ持たせてもらひ、家に歸つてからは又ズラリと並べて三兒で説明をする。

●をばさんヤ子供達の家は少し小高い處にあるのであるが、夕方ふみ子(三年二ヶ月)ハ海上を見て「アレオフネが這ウテマス」といふ。英夫は漁船の多いのを見て「ニンギヤカナヨ、博覽會ミタイナノシ」と、此春大坂に通れられて、博覽會でゾロゾロと同じ物の澤山並んであるのが、此小さい人の目にも心にも映じたと見える。

秋風荒む

や、

て

秋氣日々に加はりて身神頗る爽快、郊外秋色甚だ愛すべく燈火讀書亦親しむべし、柑橘黄ばんで醫師色を失すとはこれ古來の諺。されど此の好時節亦決して油斷すべきにあらず、百病の因て起る感冒は實に此の良風と共に吾人を襲ひつゝあり道路幾多の咳聲を聞く、大に注意すべきなり。今や序を以て聊か此病はつきて記する所あらんとす。

醫師ならぬ身の病を説く頗る御門違ひの感ありと雖も、吾人は只其の由來を尋ねんとするにありのみ。

我國古來感冒を風といふ、時候に障りたる意なり。風氣とも云ふ。又邪氣ともいふ之れ熱を發し

て嘔語譫言をなす様恰も邪鬼の所爲の如き故ならん、併せて風邪といひ今日普通に用ひらる。而して其の流行性のものは疫癘といふ、疫とは廣き意味にして説文には「民皆疾也」とあり。字林には

「病流行也」とあり癘は惡鬼を意味す。「鬼神爲三之疵厲」或は「疫役也、言有レ鬼行レ役也」と解す。古人の思想にては、惡鬼ありて障礙を爲すものなり

と思ひしならん、されば疫とは幾多流行傳染の病に通ずれども、世俗多く熱病を意味せしなり。古書に記せる二三を擧ぐれば

唯假初に風の心地と仰候ひて程なく空敷成給ひて候（謡曲柏崎）

さて八月の十日あまり六日にや秋霧にをかされさせ給ひてかくれまし〜ぬ（神皇正統記後醍醐帝崩御の段）

侍臣より惟風の心地にましませば頼てなぞり給ふべしと申せしかば帝

露の身を草の枕におきなから風にはよもと思ふはかなさ

と詠じ給ふ（吉野拾遺）

古來國史に疫病を記したるは、書記崇神天皇五年を始めとす、其後咳病流行せり。之は園太曆に

ある左大史小槻清隆天下病事あるに依り御祈を行はせられし勘文中の

文永元年七月上旬以來咳病流行を初めとす。續で庚永四年の咳病は頗る甚しかりしや、同書に記して曰く

九月十二日天晴、傳聞上皇院 御咳病興盛、明日長講堂供花始行延引……………凡 此間人々咳病

或有三殞レ命之輩……………是唐船歸朝之時有二此

事^二之由、世俗稱^レ之^一……………

是月京都嵯峨の天龍寺供養にて、第一回の天龍寺船元より歸國し、彼邦より咳病を傳へたるなり

同十九日野資明の書狀に

御咳氣如何様令^ニ聞給^一候哉、早可^ニ參承^一候
來廿七日御講御參事、敎光明日可^ニ參申入^一之由
申候、定而參候歟

とわれば、一周日を経て漸々御快くなられて、御講の日取も議せられたるならん。其の後十六年を経て延文五年の疾疫も雲井畏き邊まで上れり。近衛關日道嗣公の日記なる愚管記に

十月六日己丑、禁裏^{後光}、嚴帝^{御上}氣之由、日來風聞
此間煩敷御……………御喉邊成腫……………廿二日乙

巳、今日有二勅問^二事、御上氣未無^二御平癒^一之間、
年始公事不^レ可有^二出御^一……………

とあり、上氣ハ「ノボセグ」なるべし。此年康安と

改元せられたり。爾來或は咳病或は傷風或は三日病等の名にて其の流行を記載せり。疫病の事人命にかゝるを以て、往古よりの朝政に甚だ重んぜられしが、疫は邪鬼の所爲と思ふ時代なりし故、醫療よりは神佛の祈禱に最心を盡されたりき。

近時インフルエンザの我國に傳はりしは實に廿三年の春にあり。一時流行して後熄みしが其の十月の末頃又支那より傳へて頗る激烈を極めたりしと云ふ。

露

摩訶生

夏の日に中に玻璃製のコップに水を容れておくと
何時の間にか、コップの外側に水の粒が現はるゝ

之はコップの外側が非常に冷たくなつて居るのに其割合に外部の空氣は暖かくて従つて濕氣が多い。

それが冷たいコップの外側の面に觸るゝ、そこで其水分の幾分が露化したのである。

冬の晨、多人數一列車に來ると、知らぬ間に其客車の硝子窓の面が曇つて居る、之も割合に室内の空氣の暖く従つて濕氣が多い、それが冷たい窓硝子に觸れて其水分が滴化して露となつたのである。

之と同理で、晴れ渡れる靜なる夜には温熱放散の爲に空氣中の水分は先づ冷たい草木の葉に凝結して露となる、之は葉末の露の生成についての舊説であるが、實際は木の葉草の葉等の夜間の温度は外氣よりも暖かい位だ、だから外氣の水分が來つて葉面に凝結するのではなくて、葉面わたりの水

分が蒸發せんとして外氣の冷さの爲に據なく其處に露化したのだ、といふ説も起つて居る。

兎も角も空氣中に抱合する濕氣の量には、温度によりて一定の限りがある、其一定限に達して飽和の状態となつた場合には、更に僅にても温度が下ると、其水分は水蒸氣として存在する事が出来ず、忽ち冷却し凝結して液体の水となつて、粒だつて、冷くさへあらば何處此處の差別がなくとまつて居る、之を名けて露といふ……こぼれ落ちたら固より同じ普通の水に相違ないが。

夏の夕暮に、稻田の畔に蹲つて、稻葉の末に仔細に注目すると、些やかな露の粒が葉の全面に點々として居る、之を葉の面の細毛がぼち／＼反撥する、其度毎に小粒が次第／＼にはね上げられ相合して、最尖端に一粒となつて止まつて居る、

月の光にキラ／＼と宛ながら銀珠のやうで、そよ吹く風に誘はれて、稻葉そよげば、忽ち轉けて、チリン／＼と鳴り渡る。

月に誘はれ星にあてがれて、留るとはなしに納涼臺で、衣も何時しか濕うて來る、全体もだるくなる、盆の菓子さへしめつげくなる。

忠勇なる兵隊は、蒼天井の下、草を枕に、前途の成功を夢みつゝ、夜露のうつがまゝにして眠つて居つた、近時は各自風呂敷大の天幕を携帶して居つて、必要の際には相持ち寄りて一大天幕を張つて、幾分か凌ぎ易き露營をやるさうだ。

如何に豪氣な勇將でも、負ひし重傷には打勝てず、逆は鮮血に草葉の露を唐紅に染めなして、露より脆く消え果てた其古戰場で、今は萩や尾花の間に松蟲鈴蟲など露に啣きて、露命をつないで居

る、晝の最中でも。

露は元來熱帶地方や山嶽に多い、温帶地方で春にも秋にもあれど、夏の晴朗の夜のひき明けの所謂朝露が最も面白い。

手水がやつと終つて、楊枝と手拭と握つたまゝで、荒園にとび出て見る、草も樹も高さも低さもぼと／＼緑も滴りさうである、昨日の日に萎れかゝつた向日葵も今朝は全く別人の如く張りきつて居る、雨蛙が其葉の表に丸まつて未だやすんで居る、我足下にぼつと音して今咲いた朝顔に、見る／＼露にぬれ脚の花蜂が駆け込んで、試に楊枝の柄尻で後から花筒を蓋してみると、蜂は喫驚くり逆戻り、慌て、手を引く其途端、脇が後の梧桐の可なりの幹にコツツリコ、御蔭で露を頭から。村の牛飼童は、早や垣根を過ぎて歸り行く、背

負へる草刈籠の緑滴る千草の中に、あはれ幾その露を刈り入れしをだらふ。

學校通ひの腕白連も風呂敷包を片腋に、船蟲然たる草履にて、幾萬粒の露踏み破り、揚々乎として通過ぐる。

頓がて隣の尋常一年生、蓮の葉を丸めて其未を握つて大事さうにさし出しつやつて來た、我泉水に預かつて呉れといふ、何であるやらつゆ知らず受けて見る、成程大きな露が唯一粒、中にゴロゴロゴロツイテ居る、其唯一粒の又中に、丁斑魚の兒どもが確に一匹、鱗チラ〜と肝處乃公の住宅と得意になつて、口をへの字に威張りかへつて泳いで居た。

はちす葉の濁りにしまぬ心もて
何かは露を玉とあざむく

私立東洋幼稚園の創立

嘗て、岸邊福雄君と遭ひし時、君は幼稚園設立、幼兒保育のことに付きて、熱心に語られ、余も亦君の如き有爲の教育家にして、眞實、斯道の爲に盡されんには、如何ばかり社會の爲め、人の爲めならんなど談し合ひたることありしが、近頃に至りて、君は一書を贈りて、愈々かねての企圖を實施したりと報じ、併せて同園の規則書を贈りしぬ、ここに、君か幼兒教養の主義として記載する所を紹介すべし。

私立東洋幼稚園教養主義

本邦に幼稚園が創設せられてから已に三十年になりますに、左程進歩せぬ様に見受られますが、凡事は云うは易くても行ふは難しで、いづれ其方針を定め、其方法を考ふるか、第一着ではあり

しようが、其効果を十分にあげることは、運用者其人にあると考えられます、然るに、理論に明かなるものは實際に暗く、實際に巧みなものは理論に通じないのを常としますから、原理と實際との程よい調和を見ないのか、我が幼児教育不進歩の原因であらうと察せられます。不敏ながら小生は、元來子供好きの性分でありまして、夙に身を兒童教育に投じ、兵庫縣、東京府師範學校などで、前後十余年間、子供の教育に従事しました、其間専ら遊戯法の研究に志し、兒童と一しよに、日々楽しく遊び戯れましたが、長年月の間には、自然得るところがあつて愈々其興味が忘れ難くなりましたから、更に一步を進めて、幼児教育を自分の天職と信任して、一生涯の道のために盡さうと思ひたち、遂

に茲に此幼稚園を創立した次第であります。(中略)
 本園は、斯く體育を主として居ますから、其教養は全然遊戯によるのであります、尤もこれを細別しますれば、遊嬉、唱歌、談話、手技の四つになりますか、要するに、歌を歌はせるも、話を聞かせるも、恩物を取扱はせるも、全く遊戯的でありますから、何事も幼兒の氣の向くがまゝにさせつゝ、其間に良き感化と正しき仕附けとを與えまして、少しも束縛する様な事はありませぬ。
 此主義は、廣大な運動場を持つてこそ、初めて十分に其目的も達せらるゝのでありますか、市内では到底遂げ難い望と存じ、こゝに新に幼兒運動用の馬車を拵えたのであります。此車で、

毎日或は公園に或は郊外に子供を連れ出しますから眺めは廣く空氣は清きあたりで、爛熳たる花の下、馥郁たる香の中で鳥や蝶を友として、共に楽しく歌い舞うと云ふ有様で、眞に自然の樂天地に遊ぶ事が出来ますから幼稚園教育の本意にも適うことと信じます。

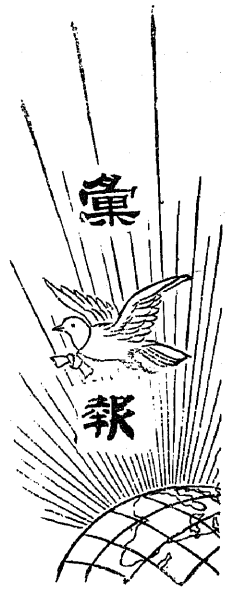
しかし、幾ら方針を確定し方法を考究しましても、之れを實際に施すに、教師其人を得ませぬと到底教養の實効をあげる事は望まれませぬから、本園では保母の撰擇には最も留意しまして、愛情の深い子供好きで、氣質が正しく快活で、身體も亦健全の上に、相當の學識もあり、多年の經驗ある婦人を聘用して居ります。そして、園主自らはよしや彼の國のベスタロッヂやフロエベル氏には及ばずとも、唯、誠意之れを學

んで、一生を幼兒教育の道に捧げんことを誓うのであります。

尙ほ當園の實況は他日時を得て參觀の上報導すべし。

幼兒期に於ける遊戲は無意味なる消閑の戯にあらずして深き意味を有す、されば母なる人よ、よく之を培養せよ、父なる人よ、よく之を愛護せよ

フロエベル



●女子高等師範學校

郊遊會は去月五日千葉縣

八衢に於ける茸狩りとして催うされたり、天高うして氣清く金風肌に快よき秋の一日の清遊、いと面白く且つは總武鐵道會社特別の配慮にて、存外の獲物多く午後九時頃歸校したりけり▲同附屬高等女學校に於ても全じき月の十四日、同じ地方に同じ遊びを催うされしが、當日は折あしく、半日の雨天なりしかども、さりとては中々面白かりしと▲同十六日には本校生徒一同、土曜會に兼ねて南摩老先生の送別會を催うしたり▲同十九日より

例に依りて、本校生徒の日光修學旅行は始まりぬ

日光の秋色、由來本邦に冠たり、日夕機邊勉學の齣襟を洗滌せんが爲に、此時此行最も功多からん

▲附屬小學校は同じき二十一日飛鳥山に運動會を開きぬ、▲附屬高等女學校は同じき二十五日の日

曜日高等師範學校附屬中學校々庭に於て秋季運動會を催うしぬ。今春に譲らぬ盛況にて、諸種の運動遊戯等著しく、上進の様なりとかプログラムは

次に
女子高等師範學校附屬高等女學校第九回秋季運動會順序

開會 午前九時

- 第一 唱歌(みが、すば) 一同合唱
- 第二 體操 (一、二、三、四、甲乙五年)
- 第三 内國地理競走 (專攻科一、二、三年)
- 第四 夕立競走 (三年)
- 第五 カレドニヤン (專攻科一、二、三年)
- 第六 膳立競走 (四年)

第七 張物競走
第八 徒競走
第九 團體競技(數種)

專攻科二年
各級有志者

休 憩

正午十二時ヨリ
午後一時マデ

唱歌(運動獎勵の歌)

一同合唱

第十 髮結び競走

一年、專攻科一年

第十一 支度競走

專攻科三年

第十二 風車

一年、專攻科二三年

第十三 コチロン

三、四、年甲乙五年

第十四 行進

二年

第十五 動物採集競走

甲五年

第十六 障礙物競走

乙五年

第十七 行進

三、四年

第十八 ランサス

四年、甲乙五年

第十九 徒競走

專攻科一、二、三年
來賓及各級有志者

第二十 團體競技

來賓

第二十一 クオードリル

來賓及各級有志者

唱歌(君が代)

一同合唱

閉 會

午後四時

運動獎勵の歌

色なき露の

夜ごとに置きて

千草の錦は

織り出されぬ

一家の和樂の

積りてゆかば

社會の平和も あらはれ出でむ
世界は樂上と かはりや行かまし

世界のなとめと なりにしわが身

一家の和樂は まづわがつとめ

かしづく夫 はぐくむ稚子の

やさしきことばも はえある笑も

たゞくもとづく わが身の健全

わが身の健全 はからんものご

今こそ出でたれ 學の憲を

千草の露の 玉をもかざし

いざくつくさん 競技の數を

いざくかへさん 舞蹈の袂を

▲本月三日は午後五時より本校生徒一同天長節祝賀會の催ありし筈なり。▲去る十二日文部省今第三十二號を以て全規程中左の如く改正ありたり

第二條 文科ノ科目ハ倫理、教育學、國語、漢文、外國語、歴史、地理、音樂、體操トス

第三條 理科ノ科目ハ倫理、教育學、外國語、數學、物理、化學、博物、音樂、體操トス

第四條 技藝科ノ科目ハ倫理、教育學、外國語、物理及化學、家事

裁縫及手藝、圖書及圖案、音樂體操トス

第四條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第四條ノ二 前三條ノ科目中音樂ハ學習困難ナリト認メタル生徒ニハ之ヲ課セサルコトヲ得

第六條 文科、理科、技藝科ノ修業年限ハ各四箇年トス

第十條 女子高等師範學校ノ卒業生又ハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者ニシテ第十二條乃至第四條ニ規定シタル科目中ノ一科目又ハ數科目ヲ專攻セントスル者ノ爲ニ研究科ヲ置ク

研究科ノ修業年限ハ一箇年乃至二箇年トス
第十二條 第三項ヲ左ノ如ク改ム

選科生ノ在學期間ハ四箇年トス但シ特別ノ事情アル者ニ就キテハ學校長ニ於テ本文ノ期間ヲ伸縮スルコトヲ得

附則 本令ハ明治三十七年四月一日ヨリ施行ス

本令施行ノ際現ニ女子高等師範學校ニ在學スル生徒ニ課スベキ科目ニ就キテハ學校長ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ受ケ新舊規定ヲ斟酌シテ之ヲ定ムルコトヲ得

尚右規定に由りて、同校規則にも、種々改正を加ふる所あり、改正規則は來學年より施行すべしとのことなり

●東京府第一高等女學校 新築校舎は愈々全部出來せしを以て、去る月十三日盛大なる落成式を

舉行せり▲同じく廿四日には、武州大宮に運動會を催したる由

●女子大學校 運動會は去月廿四日の土曜日午前九時より同校々庭に於て開かれたり。午後一時頃には來觀者の集まりたること雲の如く、門前一方ならぬ雑沓を極めたり、係員の言ふ所に由れば其數六千人に上りたりとのことなり。當日のプログラムは次の如し。

第一部

- 開會 軍樂.....陸軍々樂隊諸氏
- 第一 雙毬轉々.....高等女學校第一年
- 第二 毬體操.....(英國式) 高等女學校第二年
- 第三 白.....(和蘭遊戲) 高等女學校第二年
- 第四 綱帶競争.....(英國式) 大學部各第一年
- 第五 くらぶ體操.....(英國式) 大學部各第一年

ハドソン氏考案 高等女學校第三年西組
本校更訂

第六 風船競争 家政學部第二學部
高等女學校第三年東西

第七 綱引 (第一回) 高等女學校各學年
(第二回) 大學部

第八 御給仕 (米國遊戲)
モートン氏考案 高等女學校第二年
本校更訂

第九 啞鈴體操 (丁抹式)
アレキサンダー氏 英文豫備科第一、二年
考案本校更訂

第十 繰毬競走 高等女學校第四、五年
國文學部第二年

第十一 案山子競争 國文學部第二年
ふ (希臘式)

第十二 輪拔競争 アレキサンダー氏 英文學部各學年
考案本校更訂

第十三 辰宿列張 (米國遊戲) 高等女學校第四年東西
セール氏考案 大學普通豫科
本校更訂

第十五 啞鈴體操 (佛國式) 高等女學校第五年東西
シヨリエマール氏考案本校更訂

第十六 容儀體操 (アルサート式) 大學部二十四名
高等女學校八名

第十七 自轉車 (マーチ) 大學部
(ゲーム) 高等女學校八名

正午休憩
第二部

第十八 綱引 高等女學校第一年
(佛國式)

第十九 長竿體操 高等女學校第五年東西
アレキサンダー氏考案本校更訂

第二十 御手球 高等女學校第三年東西
球々 (日耳曼遊戲)

第二十一 旗旗 高等女學校第一年
ヘンセル氏考案 家政學部第一年
本校更訂

第二十二 球竿體操 (英國式) 大家普通豫科
ハーグイ氏考案 本校更訂

第二十三 徒競走 高等女學校第二、三年
操 (西班牙式)

第二十四 輕麗體操 (西班牙式) 高等女學校第四年東西
ハドソン氏考案 本校更訂

第二十五 第二虹霓舞 (佛國遊戲) 英文學部拾四名
パツテリック會撰 定本校更訂

第二十六 障害物競走 大學部十二名
走

第二十七 あまぞん (羅馬式) 高等女學校第五年東西
ステピンス氏考案 本校更訂

第二十八 巨幕鈴 (西班牙遊戲) 高等女學校第四年東西
シヤールウエンカ氏考案本校更訂

第二十九 花寶 高等女學校第五年東西
ロスタ氏考案 本校更訂

第三十 自・轉 車 (マーチ).....高等女學校八名

第卅一 ばすけつと、ぼーる.....大學部五十名

第卅二 圓 舞.....大學部各學年

君 が 代.....高等女學校第四五年

番 外 ろーん、てにす.....一等 同 合 唱

午前八時より全九時まで.....大學部七名及び

正午より午後一時まで.....高等女學校五名

●竹柏會、佐々木信綱氏送別會 先月四日、小石川

酒井家邸内に於て、佐々木氏が今回南清漫遊の途

に上らるゝに付きて送別會を開きぬ。席上島田三

郎、巖谷小波氏の演説あり、終りて園遊會の催しあ

り、一同撮影の後五時散會したり、因に全君は先月

卅日新橋發旅行の途に上れりといふ南清偉大の風

光、幾多の詩料を供せんとして君を待てるなるべし。

●東洋女學校創立 文學博士村上專精、文學士

和田鼎、同村上龍英氏等發起人となり大隈伯、渡

邊子、井上兩文學博士等朝野の學者紳士の賛成を

得て一大女學校を創立する由資金は凡そ十五萬圓
の豫算にて募集すべしと其趣意書に曰く

夫れ我國古來の徳教たる近世二百年間士人以上に在ては頗る儒
教に據る者ありと雖も溯りて千數百年間貴賤上下に通じて費ね
く感化を及ぼせる者を求むれば其れ唯佛敎の一途あるのみ而し
て其の化の及ぶ所遺傳の久き浸染の深き其の勢力年平拔く可か
らざる者あり是を以て苟くも之に據て之を導くときは俗を見へ
風を移すも亦甚だ難しと爲さず是れ固より男女を論せずと雖も
女子に於て尤も更に其の然るを見る然れども現今佛敎各派の情
態たる久しく眞諦に偏倚して俗諦に疎濶なりしを以て未だ遠か
に其要求に應ずること能ばざる者に似たり是に於て世或は儒敎
を主とし或は基敎に資て以て之が教養を爲す者ありと雖も概ね
奮陋に泥まされば新奇を衒ひ遂に國情民俗に契當すること能は
ず其の甚しきは知識愈々進みて言行愈々社會に逕庭し感化益々
深くして動靜愈々家庭に軒睡するが如き者あるに至る人生の一
大恨事豈復た之に過ぐる者あらんや

我等自ら揣らず此の闕典を補充せんが爲めに茲に東洋女學校を
創立し其の智能は尤も社會に切實なる常識の發達を主とし其の
徳器は尤も家庭に順應せる精神の化育を要し新奇を衒はず奮陋
に泥ます智徳相資けて以て健全なる淑女を陶冶する一大鑛輔と
爲さんと欲す云々

●千葉縣女子師範學校設立認可 豫て設置出願

中なりし千葉縣女子師範學校は愈々千葉縣千葉郡
千葉町大字千葉同寒川に設置し、明治三十七年四
月一日より開校の旨去月八日許可せられたり。

●文部省教員檢定本試験　は愈本月五日より引
き續さて廿五日に結了する由なり。

新刊の讀物

◎運命開拓策

世は擧つて自利にのみ汲々たる時、『要するは實に
自ら教育し、訓練し、誠飾して、品性と人格とを
崇うせんとする丈夫』である。本書は實に、自ら
此の如き丈夫たらしめんとて、譯述せられたるも
のにて古來幾多の偉丈夫が、確固不拔の理想を抱
いてよく逆境に處し、障害と戦ひ、遂に自ら運命を
開拓する實例は、讀むに従つて、紙上に躍出す。炎

焦既に去つて、燈火漸く親しむべきの時、一讀案を
打つて快哉を叫ばしめ再讀遂に嚮天をして起たし
むる慨ありといふべき書物である。(三十錢　本郷
弓町一ノ八　成功雜誌社發行)

◎天真爛漫

婦女叢書の第一篇たる本書は、前々から婦女新聞
に方々から集つて來た子どももの言行を一冊の可愛
い本に綴つたのである、子どももの書いた、不思議
な繪なども入つて居る。讀んで罪のないこと、此
本の如きは少いでせう。(一冊十三錢　牛込區東
五軒町四一　婦女新聞社發行)

◎驪語　全一冊　本多増次郎譯

最初親切な善き主人の家に養はれて周到な注意と
温情を以てよく育てられ、馬として極めて良く育

つたブラックビューターといふ馬の自叙傳で、第一篇幼時の我家、兎狩の慘事、稽古の困難、バートキツクの邸園、さい先善し、自由、デンチャー、デンチャーの物語、メリーレッツグス、果園の立談直言、暴風雨、惡魔の商標、ジエームスハワード老馬丁、火事、ジョフマンリーの話、醫者使ひ、知らなんだ計り、ジョーグリーレ、別離。第二編伯爵邸、ストラキイ、逐電せし馬、ルーベンスミス、その結末、降り坂、貸馬の境遇、倫敦ツ子、窃盜、欺騙者。第三編、馬市、倫敦の辻馬車、老軍馬、ジエリーバーカー、日曜稼ぎ、金科玉條、眞の紳士、病身のサム、デンチャーの末路、肉屋、選舉、眞の友、キャブテンの後繼、ジエリーの新年。第四編貴婦人、不幸の極、農夫と其孫、最後の我家、など、詳しく自分の身の上話をする處、

實にかもしろく可愛らしく寫し出されて居る。幸福に暮す時もあり、安樂な時もあり、困難に逢ふ時もあり、賣られくて様様の人の手に渡り温かな取扱もされる、冷酷な使ひ方もされる、困る苦む悲む喜ぶ事もいくらもある、馬同志の友達や知合もあれば恩をうけた人間も多くある。とにかく種々の境遇に遭つた馬一代のありの儘を馬自ら語るのだから、讀み行く間に、彼等は如何に取扱はるゝを以て幸福として居るか、物は言はずとも如何に何事をも知り且つ感じて居るか、どんな事を喜びどんな事を苦痛とするのであるか、人間が馬に對してこういふ取扱は改良してやらなければならぬ、こういふ風にしてやると良い、など、丁度身を馬に置いた様な感じが絶えず起るので、馬の世界を知りて之に同情し之を愛育する

心が知らず識らず深くなるのみに止まらず、博く動物全体に對する哀憐の情が厚くなる。讀み終りて腦裏に印象された此種の知識感情は乾燥な抽象的の道德談をさかせられ讀ませられたよりは、どれ位深いかわからぬ。誠に譯者が「ブラツクビューラー」が歐米に於ける感化の廣く且つ大なるは更に言ふを要せず試みに英語國民の一員に就いて問へ其男女老幼如何を問はず未だ畜類に興味を有せざりし者は此の書の爲めに深厚なる同情を以て畜類を我が友なりと感ずるに至り既に注意を彼等に寄せたる者は一層心を細かにして彼等の教育健康幸福感情を思念するに至りしを自白せざるはなからん蓋し動物の性情慣習を知るは一國を發見するなり動物を愛憐訓育するはやがて人類の品格を養ふなり父母たる者は之に依りて子女熏陶の幾微

を悟るを得べく幼弱の者は之に依りて人道實踐の初階に上るを得べし動物を哀れむ豈に獨り彼等の爲のみと謂はんや」と緒言中に述べられた通りで日本語國民が此有益な譯書に由りて受くる感化は莫大なものであらう。(定價八十錢 東京市南甲賀町八 内外出版協會)

●家庭新聞第十號

何時か本誌に紹介した所の家庭新聞は、其後益紙面に光彩を添ふるに至つた。本號載する所の發刊の趣旨はよく本新聞の面目を寫して居る、其一節に曰く

家庭は家族の心身を、安んじ慰むる一種の樂園である『家庭新聞』は此の樂園の讀みものとして、娛樂の中に趣味を感じ、趣味の中に理想を看出さんことを期したい。

家庭の平和と快樂とは家族相互の感情、意志、性質等を理解し

互に相知り相信じ相頼らねばならぬ『家庭新聞』は此の間に立ちて家族各自の特色を研究したい、故に『家庭新聞』は家長主婦は勿論、老人も子供も下女も番頭も楽しんで讀むべき家庭唯一の讀み物に供したい。

實に本新聞の家庭の讀み物として多方面多趣味なること、他に容易に其類を見ず、吾等は一汎の家庭に向つて、是非とも此の如き讀み物を勸むるものなり。(毎月二回、一ヶ月七錢五厘、發行所、熊本市内坪井町八、家庭新聞社)

●成功 第三卷第一號

村上濁浪氏の主筆なる本誌は本號に至りて發刊滿三年に達したり。蓋し方今幾多の雜誌中、本誌の發刊部數に勝るものは甚だ僅くなるべしといふ。本誌納むる所、加藤博士の學者生涯、サリスベリ一卿立身傳、現代青年と精神修養等例に由りて最

も讀むべきもの、而して村上氏の成功問題の経過と余輩の本領は、目下成功問題の八釜しき折柄是非一讀すべきものなり、尙本號には附録として日本民族將來の活動界を添へたり、日本人の移住すべき海外諸國の案内を精細にしたるものなり(定價一冊十錢、東京本郷弓町一ノ八、成功雜誌社)

松坂通信

●松坂女禮料講習會 三重縣松坂町にて有志家の發起に由りて、今般題目の會を開き講師として石井泰次郎君を聘し、先月十五日より凡そ一週間開會せり、因に、開會の前日、山室山神社(本居翁神前)に於て式庵丁、長久の鯉、石井治兵衛、ふみだこ、石井泰次郎、を奉納し、尙同社務所に女子作法の手藝花結及包物婚禮式床供物

等を陳列し參觀者の觀覽を許したり。尙、本會員數は非常の申込にて、目下既に百二十餘名に及ぶ閉會式とともに割烹展覽會を催うす筈なり

兵庫縣通信

在攝津魚崎 通信員 平 岩 學 洋

○神戸婦人會慈善音樂會 同會にては來る十七日午後七時より神港俱樂部に於て開會の筈なりと云ふ。

○龍野幼稚園の玩弄物展覽會 同會に於て去る三四日兩日間同郡婦人會の事業に係る小兒玩弄物展覽會を開催せしが、會長谷部さよう子幹事松浦のふ子等非常なる幹旋により數千種の玩弄物を蒐集したりといふ。

○私立幼稚園の開園式 過般許可申請中たりし

神戸市下山手通七丁目私立聖家族幼稚園にては此の程本縣知事より該許可なりたるに付來る十日午前開園式を舉行する筈なり

交詢欄

▲土佐愛讀者の君に答ふ 兼て御紹介申し置き候醬油の黴を防ぐ法に就て御質問に候が其れは決して御心配には及ばず候小生實家にては永年經驗致しれり候へ共今に於て一度も味の變りしこと等一切之れなく候かつかへつて分析致し候へば同じ品にても施さざるものより餘程宜るしき様感じあり候 (學洋)

▲小野鷲堂の書で、和文のを御持ちで不用の方は安くお譲り下さいませんか ▲人物、風景の寫眞で反故に付せらるゝ分御所持の方は、妾の妹の爲

に御惠賜に預り度く候。(以上、三河西加茂郡筋
生村黒笹、近藤とらこ子)

會 報

第三十常會

明治三十六年十月十日午後一時三十分より女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會高等師範學校教授森岡常藏君の演説(幼稚園の立場と其の務)及會員の隨意談話并に遊嬉の實習等ありて午後四時過閉會したり當日は客員中川謙二郎君にも來場せられ會員の出席七十餘名にして近來稀なる盛會なり

入 會
女子高等師範學校

安 藤 さ だ

全 上

大坂東區島町北大江幼稚園
全 上

京都佛光寺高倉西入豊岡幼稚園

和歌山市廣瀬中ノ町二丁目

和歌山市新留町

和歌山市南基五兵衛町

和歌山市湊才賀屋町東ノ町

和歌山縣海草郡和歌浦町

和歌山市駕町西脇内

麴町區上二番町二

三重縣津市岩田山中一九

神戸奥平野村三八ノ九

麻布區市兵衛町一ノ一三

小倉市西魚町二五

靜岡縣伊豆國田方郡伊東村松原一七九

本郷區森川町一新坂通三四五號栗原方

麴町區元園町一ノ二七

右安東てい紹介

右阪井あい紹介

右武井綱枝紹介

右野口ゆか紹介

柏木ふさ
村尾まさ
高橋しげ
司馬のぶ
白樫よしの
森 織 衛
中島雪枝
鈴木春枝
遊佐茂穂
三宅民枝
中松ひで
土保かん
右松村ひさ紹介

池田その
倉田やす
右田中文紹介

戸上初瀬
齋藤はつ
野崎しも

磯畑せい
右野口ゆか紹介

機畑せい

七十七

岐阜縣岐阜市東司町

小石川大塚辻町十八養育院内

牛込區納戸町六

牛込區下宮比町一〇

改姓

轉居

京橋區五郎兵衛町九へ

牛込區小川町三ノ三七へ

神田區旋籠町一ノ一二へ

四ッ谷區永住町二へ

新潟縣縣北蒲原郡新發田高等女學校へ

會費領收

自明治三十六年九月廿三日
至明治三十六年十月廿一日

金額

姓名

五〇	三六、一〇—三七、二	木村茂枝
六〇	三六、九—三七、二	栗山とぐ
一〇〇	三六、四—三七、一	佐藤せん
三〇	三六、二—三六、四	阿部のぶ
一〇〇	三六、三—三六、一二	伊藤ちか

鹽谷よう
右安藤てい紹介

安藤とき
右安藤かつ紹介

岸邊福雄
右中村五六紹介

川上光子
改建部

井口よね

藤澤阜月
有川ひさえ

四村茂登
高橋いち

關しん

八〇	三六、五—三六、一二	甲斐直枝
一〇〇	三六、二—三六、一一	廣瀬たみ
一二〇	三五、一〇—三六、九	金岩薫
一二〇	三六、九—三七、八	伊東せつ
六〇	三六、七—三六、一二	中澤よし
六〇	三六、六—三六、一一	井上たつ
六〇	三六、二—三六、七	吉野ふみ
三〇	三六、一〇—三六、一二	安西せい
一〇〇	三六、二—三六、一一	吉岡うた
五〇	三六、一〇—三七、二	高田芳女
五〇	三六、一〇—三七、二	飯山らん
一〇〇	三六、一〇—三七、七	中松ひで
三〇	三六、七—三六、九	雨森せん
三〇	三六、七—三六、九	西島富壽
三〇	三六、七—三六、九	高橋忠次郎
七〇	三六、六—三六、一二	淺野てふ
六〇	三六、一〇—三七、三	近藤しげ
五〇	三五、九—三六、一	富岡龜門
二〇	三六、八—三六、九	南摩まき
三〇	三六、七—三六、九	黒田定治
五〇	三六、五—三六、九	尾田けい
三〇	三六、七—三六、九	今立裕
一四〇	三五、八—三六、九	武田きん
三〇	三六、七—三六、九	下村三四吉

四〇 三六、六——三六、九
 三〇 三六、七——三六、九
 二〇 三六、八——三六、九
 五〇 三六、五——三六、九
 四〇 三六、六——三六、九
 一〇〇 三五、一二——三六、九
 七〇 三六、三——三六、九
 三〇 三六、七——三六、九
 一五〇 三五、四——三六、九
 三〇 三六、七——三六、九
 三〇 三六、七——三六、九
 一〇〇 三六、一〇——三七、七
 五〇 三六、五——三六、九
 三〇 三六、七——三六、九
 三〇 三六、七——三六、九
 三〇 三六、七——三六、九
 一〇〇 三六、六——三七、三
 三〇 三六、七——三六、九
 四〇 三六、六——三六、九
 三〇 三六、七——三六、九
 三〇 三六、七——三六、九
 三〇 三六、七——三六、九
 七〇 三六、六——三六、一二
 三〇 三六、七——三六、九

鳥居 鏡三郎
 新 免 義 勇
 波多野とく
 大羽 ひさ
 矢作 てつ
 山口 西三郎
 小池 みつ
 榎山 榮次
 堀越 源二郎
 吉村 千鶴
 新井 博次
 森 織 衛
 斯波 やす
 立 花 春
 加藤 せつ
 伊 藤 成
 中島 みつ
 谷田部 しゆん
 森 岩太郎
 岡田 起作
 齋藤 鹿三郎
 佐方 しづ
 福本 ゆき
 伊藤 弘一

一〇〇 三六、五——三七、二
 一〇〇 三六、一〇——三七、七
 一〇〇 三六、八——三六、一二
 一〇〇 三六、三——三六、一二
 一〇〇 三六、三——三六、一二
 一〇〇 三六、三——三六、一二
 一〇〇 三六、三——三六、一二
 一〇〇 三六、九——三七、一
 五〇 三六、一〇——三七、二
 五〇 三六、一〇——三七、二
 三〇 三六、一〇——三七、二
 三〇 三六、一〇——三七、二
 三〇 三六、一〇——三七、二
 一〇〇 三六、一〇——三七、三
 六〇 三六、一〇——三七、三
 六〇 三六、一〇——三七、四
 一〇〇 三六、七——三七、四
 六〇 三六、一一——三七、四
 五〇 三六、六——三六、一〇
 五〇 三六、六——三六、一〇
 一二〇 三六、四——三七、三
 五〇 三六、一一——三七、三
 五〇 三六、九——三七、一
 六〇 三六、一〇——三七、三
 六〇 三六、一〇——三七、三
 六〇 三六、一〇——三七、三
 六〇 三六、一〇——三七、三
 六〇 三六、一〇——三七、三
 六〇 三六、一〇——三七、三

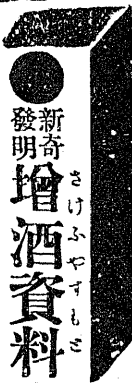
打越 ふじ
 安田 りん
 田中 ふみ
 岩月 せつ
 松澤 つや
 小田 梅乃
 坂井 めい
 戸上 初瀬
 高橋 しげ
 村尾 こま
 成川 その
 近藤 つるよ
 齋藤 はつ
 相賀 よし
 高橋 いち
 小杉 さと
 一色 とよ
 野口 ゆか
 大橋 いぬ
 高野 ちよ
 福尾 きく
 岩村 えつ
 安藤 たみ
 服部 たき

五〇	五〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	三〇	四〇	五〇	五〇	六〇	三〇	六〇	五〇	一〇	
三六、一〇——三七、二	三六、一〇——三七、二	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇——三六、二二	三六、七——三六、一〇	三六、一一——三七、三	三六、一〇——三七、二	三六、一〇——三七、三	三六、九——三六、一一	三六、一一——三七、四	三六、八——三六、一二	三六、八——三七、七	三六、八——三七、七

後藤	稲葉	柏木	安藤	藤谷	加藤	平川	奈良	益田	岩田	内田	藤岡	根来	木村	安東	吉田	小野	柴崎	丸山	野崎	矢野	後藤	山中	清家	
り	か	ふ	さ	い	き	よ	あ	一	ゆ	た	と	政	寅	て	し	て	け	か	し	ふ	い	下	寛	二郎
ん	ね	さ	だ	わ	つ	し	い	枝	き	ね	き	衛	惠	い	う	る	い	く	も	さ	ま	枝	郎	郎

一〇	一〇	一〇	五〇	一〇	六〇	六〇	九〇	九〇	六〇	六〇	六〇	六〇	三〇	五〇	五〇	二〇	一〇	三〇	五〇	五〇	五〇	四〇	五〇
三六、九	三六、九	三六、七——三六、四	三六、八——三六、一二	三六、一〇	三六、八——三七、一	三六、六——三六、一一	三六、四——三六、一二	三六、四——三六、一二	三六、八——三七、一	三六、七——三六、一二	三六、七——三六、一二	三六、七——三七、二	三六、一〇——三六、一一	三六、六——三六、一〇	三六、七——三六、一一	三六、一〇——三六、一一	三六、一〇——三七、九	三六、八——三六、一〇	三六、六——三六、一〇	三六、一〇——三七、二	三六、一〇——三七、二	三六、六——三六、九	三六、一〇——三七、二

永井	三好	川島	恒川	山田	龍澤	松田	安田	西川	佐々	對馬	石原	池邊	磯邊	小具	千葉	忍田	川上	北村	吉川	山口	安藤	星野	内田
あ	す	み	三	三	み	左	真	か	々	か	原	千	せ	具	葉	千	光	いと	さ	き	とき	わ	か
い	い	つ	枝	子	ち	和	謹	め	茂	め	淳	東	い	貞	秀	代	子	と	い	よ	き	わ	ね



新奇發明酒資料
 さけふやしも
 増し(即ち貳斗)となる
 大金儲的醸造化學作用
 の一大發明新法なり
 (附録)腐敗酒直し法、
 醬油三倍増法、味噌酒
 造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香醋葡萄酒速
 造法、燒酎倍増法、味増速造法等以上の醸造家及び請賣
 營業者の大有益案内：右**無代進呈**及前記載
 今回披露の爲拾萬部限り
 の營業者にして望の方には郵券四錢相添申込次第直に傳
 習手續摘要録を送呈す速に見營業上一日も缺くべか
 らざる**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚
 確實本館の隆盛を羨み近時常館廣告に隨せし怪しき無
 意の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して
 効傳者に欺かるゝと勿れ(當館は去廿壹年の創立也)
明發元祖 東京市神田五
 軒町拾九番地 **日本授産館**

肉色白新劑
 本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間にも最新流行の發明劑
 にして如何程色黒き男女にても**純白色**に變
 特別製劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に變
 化し艶美の容貌となるを確証す世上種々雑多の色白
 藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前
 に峻烈なる特効を覺ゆ真に奇効顯著の確證新劑價は並
 製入拾錢特別分壹圓五拾錢
專賣元 東京市神田五
 軒町拾九番地 **日新館藥房**

快通流下 する特効あり本劑參劑分を用
 忽ち半以上流下す又特別製分を
 もキレに流下す月閉止にて
 用れば半年以上の月閉止にて
 も必ず立處ろに流下し且つ月經
 不通月經不順より起る子宮病血
 の道を全治し多年滯り古血及
惡血毒血を確證す但し
 本劑は其奏効極めて峻烈顯著な
 るも毫も衛生無害なり婦人諸君
 安心して試藥あれ價は壹圓七
 拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分七
 拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時
 似偽藥顯はる用藥者は深く注意
 藥房」の名義に注目し購求あら
 とを乞ふ
根治見藥 (症臭腋)
 醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わさか
 りて**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる
 も速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根
 治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢重症根
 刻送藥す郵券代用必ず二割増の事(電話下谷五八番)
專賣元 東京市神田五
 軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくん

通經劑

本劑は胃腸
 を痛めず子
 宮を害せず
 如何程長き
 月經閉止も



根治見藥 (症臭腋)
 醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わさか
 りて**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる
 も速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根
 治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢重症根
 刻送藥す郵券代用必ず二割増の事(電話下谷五八番)
專賣元 東京市神田五
 軒町拾九番地 **日新館藥房**

明治三十四年二月廿八日內務省許可
 第三種郵便物認可



文部省
 検定
 廣告

發行以來唯一の完全なる唱歌教科書と
 して非常なる大喝采
 を博し僅々數月間に
 三版發行の盛運に會
 したる本書は今其
 生徒用教師用共に文
 部省の検定を経て更
 らに其眞價を發揮す
 るの榮を得たり
 從來文部省検定済
 歌集は皆悉く教師用
 即ち許可せられたる
 のみにし可し
 眞の教科書と
 ち眞の教科書と
 は檢定を經た
 り以て本書か如何に
 該科の教授上最完全
 なる良書たるかを全
 るに足るべし

空前の唱歌良教科書！
 檢定済生徒用唱歌教科書の嚆矢
 文部省檢定済

郵税一冊に就き金四錢

教師用	生徒用
全四冊	全四冊
第一卷定價金三十錢	第一卷定價金十五錢
第二卷定價金三十錢	第二卷定價金十五錢
第三卷定價金三十錢	第三卷定價金十五錢
第四卷定價金三十錢	第四卷定價金十五錢

洋琴 金參百圓以上 各種

グワイオリン 金五圓以上五拾圓迄 各種

鈴木製 舶來品 八圓以上百五拾圓迄 各種

樂隊用樂器

大太鼓金貳拾圓以上 小太鼓八圓半以上 シンバル 金四圓以上 其他バス、バット、テナー、アルト、コルネット、トロンボン等 金貳拾圓以上 百六拾圓迄

鼓隊用樂器

太鼓金貳拾圓以上 橫笛金壹圓以上
 ○學校用一組拾參圓

手風琴

金貳圓五拾錢以上 參拾圓迄 各種

保險 附 山葉風琴

定價金拾六圓五拾錢 以上金貳百圓迄

○右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジヨ
 ーレット其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

ピアノ、調律修繕

郵券貳錢 御送附目錄進呈